

静岡県文化財調査報告書第47集

木ノ行寺遺跡

—静岡県立富士宮東高等学校グラウンド改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995

静岡県教育委員会
富士宮市教育委員会

静岡県文化財調査報告書第47集

木ノ行寺遺跡

— 静岡県立富士宮東高等学校グランド改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1995

静岡県教育委員会

富士宮市教育委員会

序

文化財は、わが国の歴史・文化等を理解する上で欠くことのできないものであり、先祖が営々と築いてきた文化の遺産です。これは将来の文化創造の基礎であり糧であります。これらを保護し活用することは国民の義務であります。

なかでも、埋蔵文化財はその言葉が示すとおり地下に埋もれておりなかなか正当な評価を得られない側面をもっていますが、「土地に刻まれた歴史」と称されるように、文献や絵画等に劣らない貴重な歴史の証人であります。

静岡県立富士宮東高等学校では平成4年度より再開された男女共学に伴い学校施設の改修を進めてまいりましたが、平成5年度はグランドの大規模な改修工事を計画することとなりました。ここは木ノ行寺遺跡の範囲内にあることから、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施し、先人の遺産を記録保存いたしました。

調査は、富士宮市教育委員会のご協力をいただき、合同作業の形で実施いたしました。特に、資料整理にあたっては、実質的な作業をほとんど引き受けていただきました。この場をかりて感謝申し上げます。

先人が残した貴重な文化財を保護し、将来に伝えていくことは我々の果たすべきつとめではありますが、そこには様々な課題が山積みしています。これらの解決にあたっては、県民の皆様の理解が不可欠であります。

本書が、埋蔵文化財行政の基本資料として、また埋蔵文化財に対する理解の一助として活用されれば幸いです。

平成7年3月

静岡県教育委員会

教育長 大野 忠

序

木ノ行寺遺跡の位置する富士根地区は、若宮遺跡や大室古墳を始めとして各時代の遺跡が随所に見られる地域として古くから知られており、富士宮市内でも非常に遺跡の密集する地区のひとつであります。近年は、上石敷遺跡や峯石遺跡などが発掘調査され、この地域の古代の歴史も徐々にではありますが、解明されてきました。

静岡県立富士宮東高等学校のグラウンド改修工事に先立ち、静岡県教育委員会との共同調査という形で実施されました今回の調査では、この木ノ行寺遺跡が、古墳時代から江戸時代まで複合する有力な遺跡であることが判明するなど、多くの成果が得られました。特に、この中で、富士山麓では調査例の極めて少ない古墳時代後期の村の跡が確認されたことは、周辺に展開する市指定史跡の大室古墳や神祖の古墳群との関連も窺われるもので、極めて興味深い発見であると言えます。

ここに、これらの成果を盛り込んだ文化財調査報告書として『木ノ行寺遺跡』を刊行し、多くの方々のご批判とご指導を賜りますとともに、この調査に際してご指導を賜りました地元関係者の皆様をはじめ、静岡県立富士宮東高等学校の関係各位に対しまして深く感謝と敬意を表します。

平成7年3月

富士宮市教育委員会

教育長 藤井 國利

例 言

1. 本書は、静岡県富士宮市小泉字木ノ行寺1、234番地外に所在する「木ノ行寺遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は静岡県立富士宮東高等学校グランド改修工事に伴うもので、静岡県教育委員会財務課より調査依頼を受けて、静岡県教育委員会文化課・富士宮市教育委員会文化課が実施した。
3. 調査期間は平成6年1月31日から同年3月26日である。
4. 発掘調査は静岡県教育委員会文化課指導主事及川司、富士宮市教育委員会文化課学芸員馬飼野行雄、同渡井英誉を調査担当者として実施した。
5. 写真撮影は及川、馬飼野、渡井が行った。
6. 本書の執筆、編集は渡井が担当した。
7. 発掘調査および本書刊行に関する事務は静岡県教育委員会文化課と富士宮市教育委員会文化課とで分担した。
9. 本報告による出土品および記録図面、写真などは、富士宮市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。(敬称略、順不同)
木ノ内義昭、佐藤達雄、鈴木敏中、辻真人、前嶋秀張、前田勝己、松井一明、山本恵一

凡 例

1. 挿図中の高度は海拔高度を示す。
2. 遺構実測図の方位は、磁北を示す。
3. 土層と土器の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）で補って判断している。
4. 遺物観察表の（ ）は、推定値を表す。
5. 写真図版中の遺物番号は、挿図中のそれに対応する。

目 次

第 I 章	はじめに	1
	1. 調査の発端	1
	2. 調査の経過	1
	3. 調査区の名称	2
第 II 章	位置と環境	5
	1. 湧水地	5
	2. 周辺の遺跡	5
	3. 層 序	8
第 III 章	遺構と遺物	9
	1. 遺構と遺物	9
	竪穴住居	9
	竪穴遺構	17
	溜 井	18
	溝	20
	土 坑	28
	土 壌	28
	2. 年代と遺構の構成	29
第 IV 章	まとめ	32
	1. 遺構について	32
	2. 遺物について	34
	報告書抄録	40

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺地形図	2
第 2 図	開発範囲と調査区	3
第 3 図	地質略図と湧水・遺跡分布図	4
第 4 図	周辺の遺跡	7
第 5 図	遺跡全体図①	10
第 6 図	遺跡全体図②	11
第 7 図	第 1 号住居址	12
第 8 図	第 1 号住居址かまど	13
第 9 図	第 2 号住居址①	15
第 10 図	第 2 号住居址②	16
第 11 図	竪穴遺構	17
第 12 図	溜井の各部位	18
第 13 図	溜井	19

第14図	溝1	21
第15図	溝1出土土器①	22
第16図	溝1出土土器②	23
第17図	溝1の区分	24
第18図	溝2・溝3	26
第19図	遺構外出土遺物	31
第20図	溜井と水位	33
第21図	須恵器と内彎口縁坏の変遷	35

挿 表 目 次

第1表	周辺の遺跡	6
第2表	出土遺物観察表①	37
第3表	出土遺物観察表②	38
第4表	出土遺物観察表③	39

写 真 図 版 目 次

図版1	遺跡遠景 調査区とグラウンド	図版5	溜井 溜井埋没状況
図版2	調査区全景 調査区近景	図版6	溝1 溝1(部分)
図版3	第1号住居址 第2号住居址検出状況	図版7	出土土器
図版4	第2号住居址 第2号住居址かまど		

第 I 章 はじめに

1. 調査の発端

静岡県立富士宮東高等学校（第 1 図）では平成 4 年度より再開された男女共学化に伴い学校施設の改善を徐々に進めてきたが、平成 5 年度にはグラウンドの大規模な改修工事を計画することとなった。事業を計画した富士宮東高校並びに静岡県教育委員会財務課は、開発事業予定地内が木ノ行寺遺跡の範囲内にあるため、その取扱いについて静岡県教育委員会文化課および富士宮市教育委員会文化課と造成工事で破壊される部分の発掘調査を実施する方向で協議した。調査の依頼を受けた静岡県教育委員会文化課は、調査期間や調査体制の問題を円滑に解決するため、富士宮市教育委員会との合同調査という体制で、それに臨むことにした。

調査体制は以下の通りである。

〈調査体制〉

調査主体者 静岡県教育委員会教育長 大野 忠
調査担当者 静岡県教育委員会文化課指導主事 及川 司
富士宮市教育委員会文化課学芸員 馬飼野行雄
富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井 英誉
現場作業員 望月秀雄、天野秀男、勝俣利雄、天野一作、太田川忠雄、勝俣秀子、
大平美奈子、戸塚英子、横山ヤスエ、住吉和枝、山崎芙美子
整理作業員 藤巻千代子

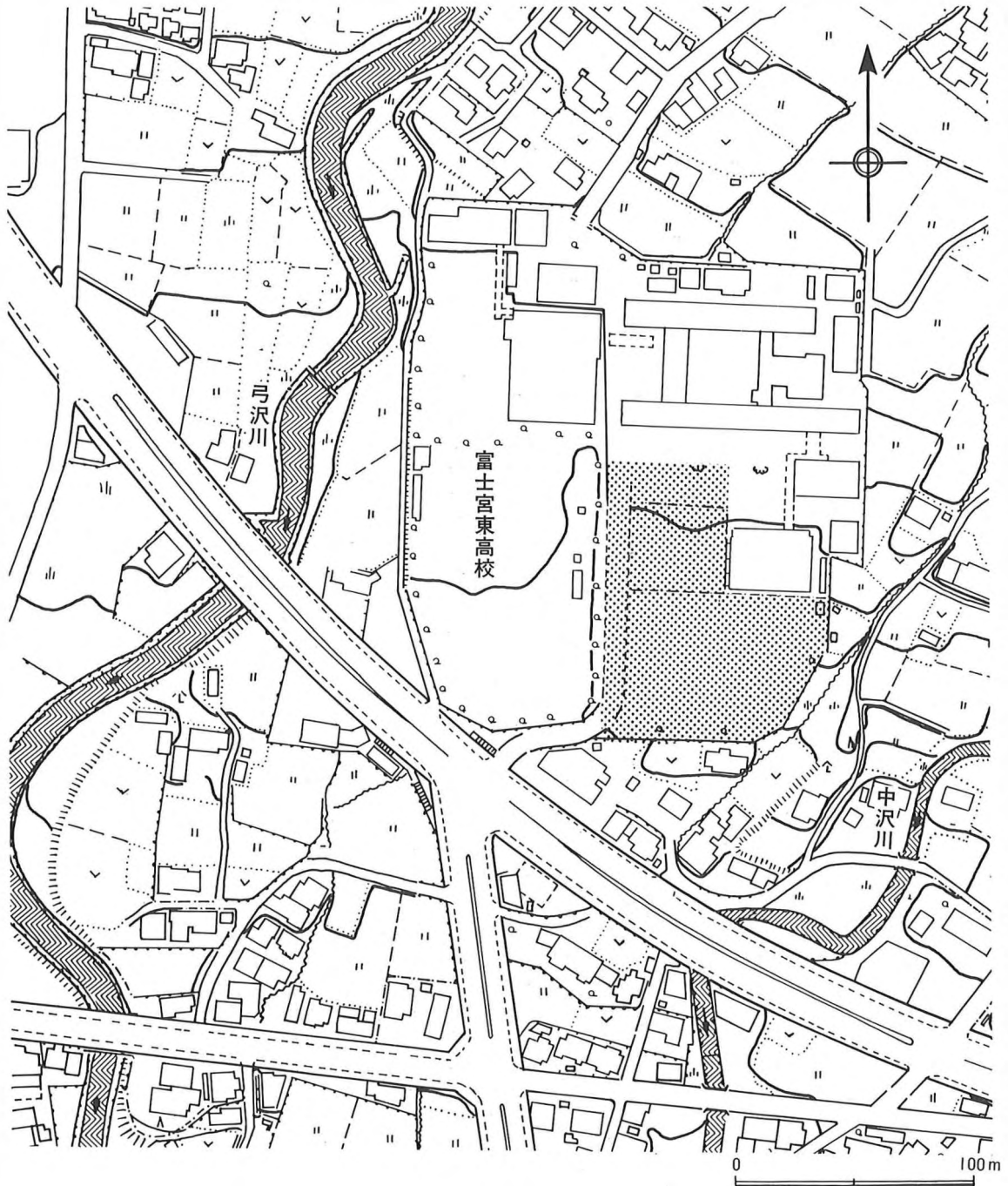
2. 調査の経過

木ノ行寺遺跡の中で富士宮東高校の部分は、その校舎建設時の造成に伴い大半が深く掘削され、遺跡の残存状態は極めて悪く、その実態も不明な点が多いため、トレンチ法の試掘調査による遺跡の範囲確認を優先させ、先ず、遺構や遺物の包含層などの残る部分を確定することにした（第 2 図）。そしてその結果を踏まえてから、富士宮東高校などと再度協議の上、本調査の具体的な計画を策定することにしていった。しかし、1994年1月31日より2月16日にかけて実施した試掘調査の結果、調査対象地の中央部分の約660㎡以外は既に黄褐色ロームや暗黄褐色土（古富士泥流上扇状地堆積物）まで掘削が及んでおり遺構の破壊が明らかになったため、調査の対象から除外するとともに残存する部分が比較的狭い範囲に限られるため、さらに調査を継続して行うこととして1994年3月26日まで本調査を実施した。整理作業は、富士宮市教育委員会文化課において、1994年10月3日より実施し本書の刊行を以て終了した。

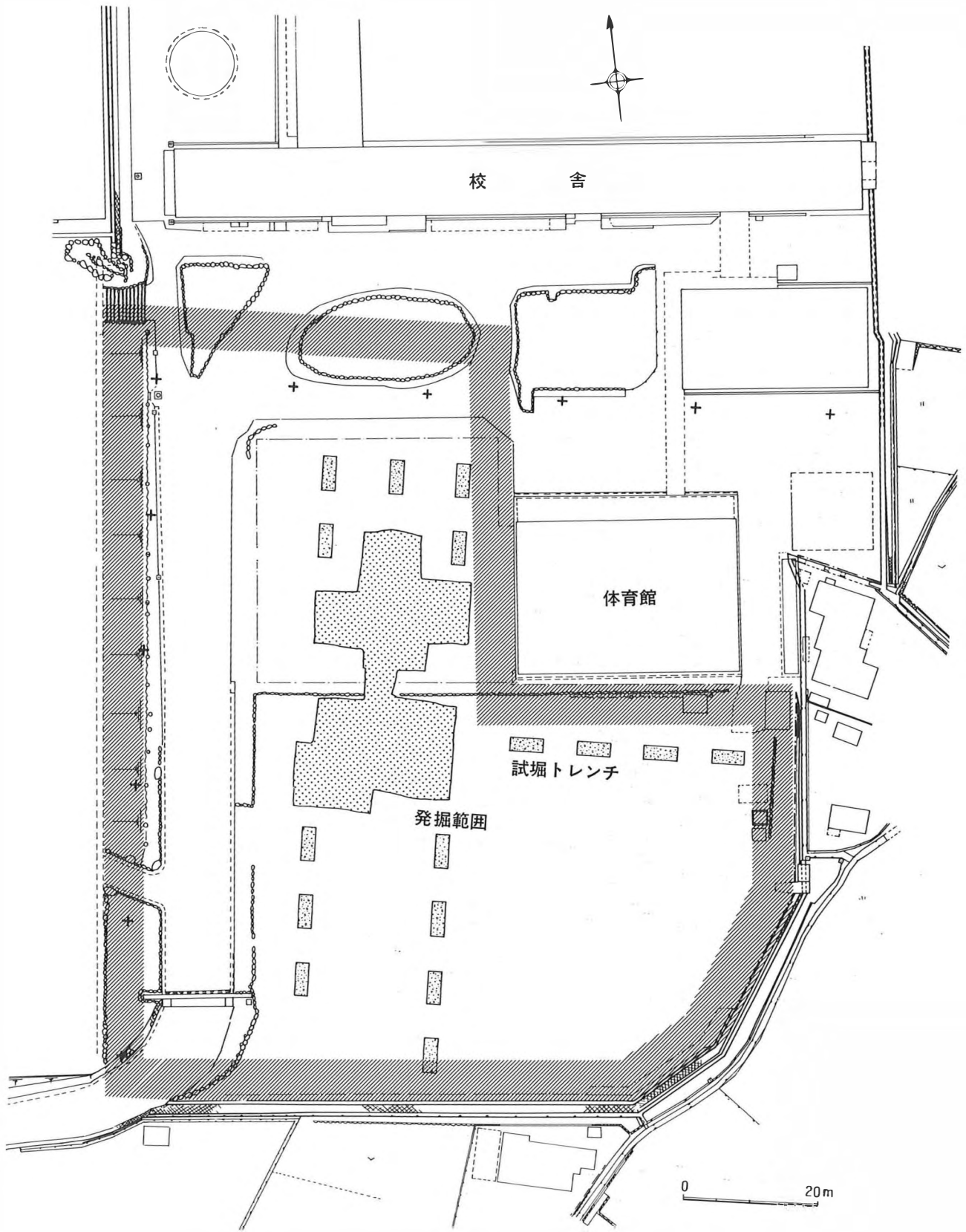
3. 調査区の名称

試掘調査は、現状のグラウンドの形態や高校の立地する地形などを加味しながら、任意に2 m×5 mを基準とするトレンチを設定して実施した。そして、試掘調査の成果より発掘調査が必要な範囲を選定して、本格的な調査に取りかかった。

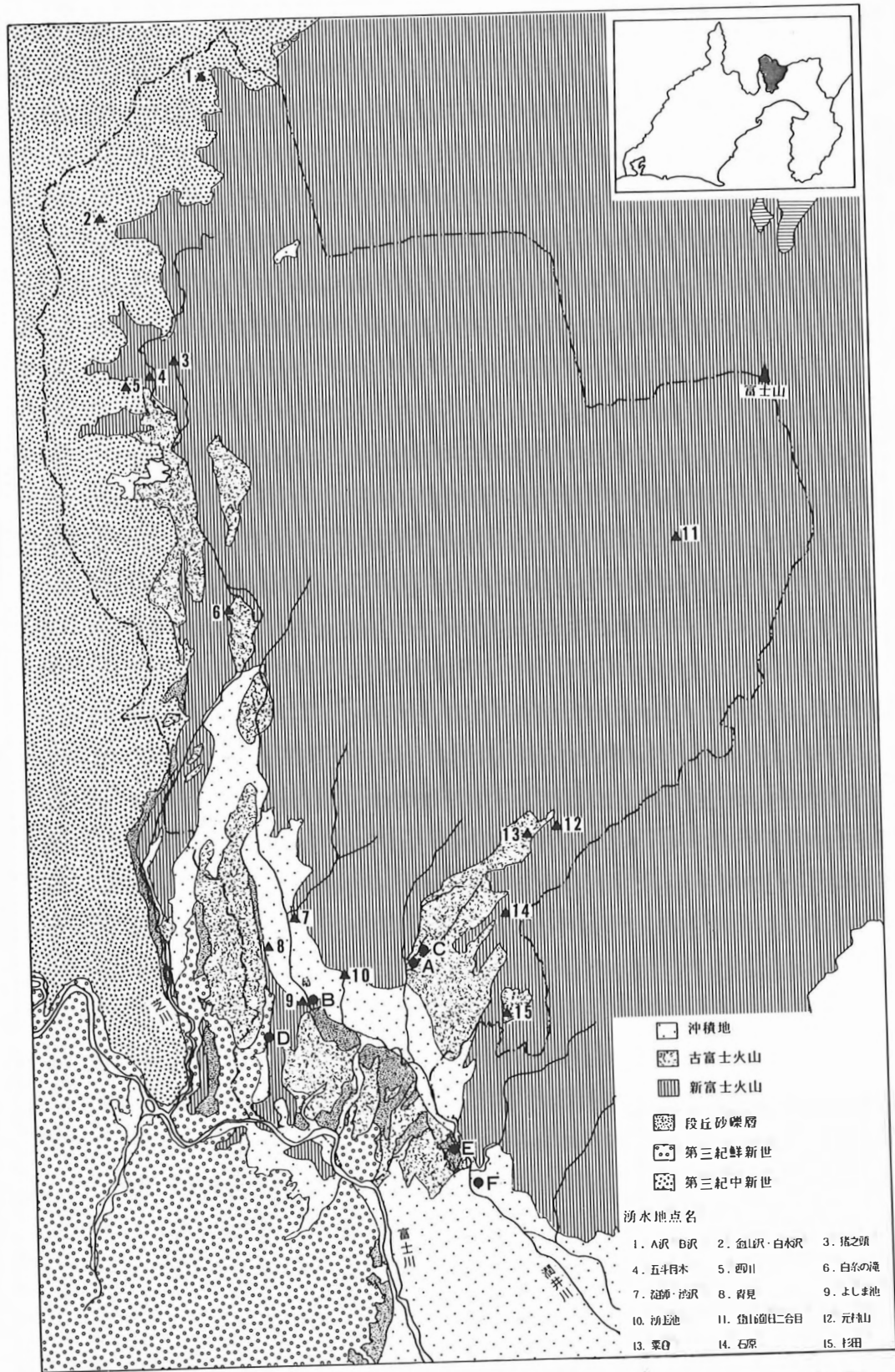
本格的な調査は、試掘調査の区画に合った5 m単位のグリッドを設定して、それによって進行させた。グリッドは、発掘区を西から東へアルファベット順、北から南へ算用数字順とすることを基本として、その交点によって、A-1、B-1などと呼称することにした。



第1図 遺跡周辺地形図（中央網部分が開発範囲）



第2図 開発範囲と調査区（発掘範囲と試掘トレンチ）



古墳時代後期主要遺跡

A. 木ノ行寺遺跡 B. 泉遺跡 C. 大室古墳 D. 別所稲荷塚古墳 E. 下ノ原遺跡 F. 沢東遺跡

富士宮市 1988 『富士宮市の自然』より引用、加筆

第3図 地質略図と湧水・遺跡分布図

第II章 位置と環境

木ノ行寺遺跡は、富士山西南麓斜面に展開する樹根状の丘陵の1つに位置している(第1図)。富士山裾野の斜面には、山頂より放射状に展開する数多くの丘陵が存在しているが、それらの中で、古富士火山の噴出物を基盤としている地域にみられるものは、広範な平坦面を形成しながら、雛壇状の丘陵が連続して認められる。木ノ行寺遺跡の東側を南下する弓沢川は、それぞれ新富士火山と古富士火山の扇状地を画する境界を示す。この川を境にその西側にほとんど見られない遺跡もその東側では地形的な環境に即して群を形成するほど広域的な広がりをもて分布している。また、富士山頂に向かって標高を増すごとに傾斜がきつくなり、気温、地形などが生活環境に適さなくなるにしたがって、遺跡の分布も大きく減少してくる。ほぼ標高250m付近を境にその上下では遺跡の数に格段の違いを見せており、生活区域として明瞭な分布範囲が、遺跡群として把握されるようになってきている(渡井1994a)。この富士火山の動態や地形環境により、富士山西麓～南麓の遺跡は、大きく偏在して分布するが、この木ノ行寺遺跡は、その密集する分布域の一画を占める遺跡で標高135m～140mの地点を占有し、眼下に潤井川の沖積地や遠く駿河湾を見下ろす比較的温暖な地域に位置している(渡井1994b)。

1. 湧水地

富士火山の重層的な構造は、地質的な特性として大きく取り上げられる。概略は、不透水性の古富士火山噴出物の上に溶岩と火山砂礫の互層から成る透水性の新富士火山の噴出物が覆い、下位の古富士火山の噴出物による基盤がより広範囲に分布していると言われている。相互の透水性の違いは、雨水などの降水が地下水となって地下に浸透し、麓に流下する作用の要因となるとともに、その地下水は、新富士火山の末端部分で湧水となって地表に出てくる。そして、それは湧水地として富士山裾野を弧状に点在している(第3図)。湧水地は、北部の猪之頭湧水群や潤井川中流域に展開する淀師、大中里湧水群などの豊富な湧水量を誇る代表的なものほかに、この木ノ行寺遺跡周辺にも神祖、出水不動尊、尾無沢などの湧水地が散在する状況で確認されている(遠藤1988)。

これらの湧水は河川を形成する源として潤井川、中沢川などの直接的な水源となっているが、それは、縄文～弥生時代を中心とした遺跡の分布範囲とも合致しており、当時の湧水に対する依存の強さが想像されるものである。

2. 周辺の遺跡

木ノ行寺遺跡の位置する富士根地区は、縄文時代早期より奈良時代まで断続的ではあるが連綿として遺跡の経営が確認されている(第4図)。縄文時代早期の集落が確認された若宮遺跡(2)は、縄文時代早期の生活域の確認とともにその豊富で多彩な遺物の出土で著名な遺跡で、この木ノ行寺遺跡と類似した標高160m程の丘陵上に立地している。

縄文時代では、前期の出水遺跡(3)、箕輪B遺跡(4)、峯石遺跡(5)などが、木ノ行寺遺跡の背後に聳える標高250m以上を測る上段の丘陵裾に沿うように、標高200m程度に帯状の分布を示している。中期の遺跡は、上石敷遺跡(6)や代官屋敷遺跡(7)で五領ヶ台式の堅穴住居が調査されているのを始め、勝坂式土器の良品が出土している箕輪A遺跡(8)など

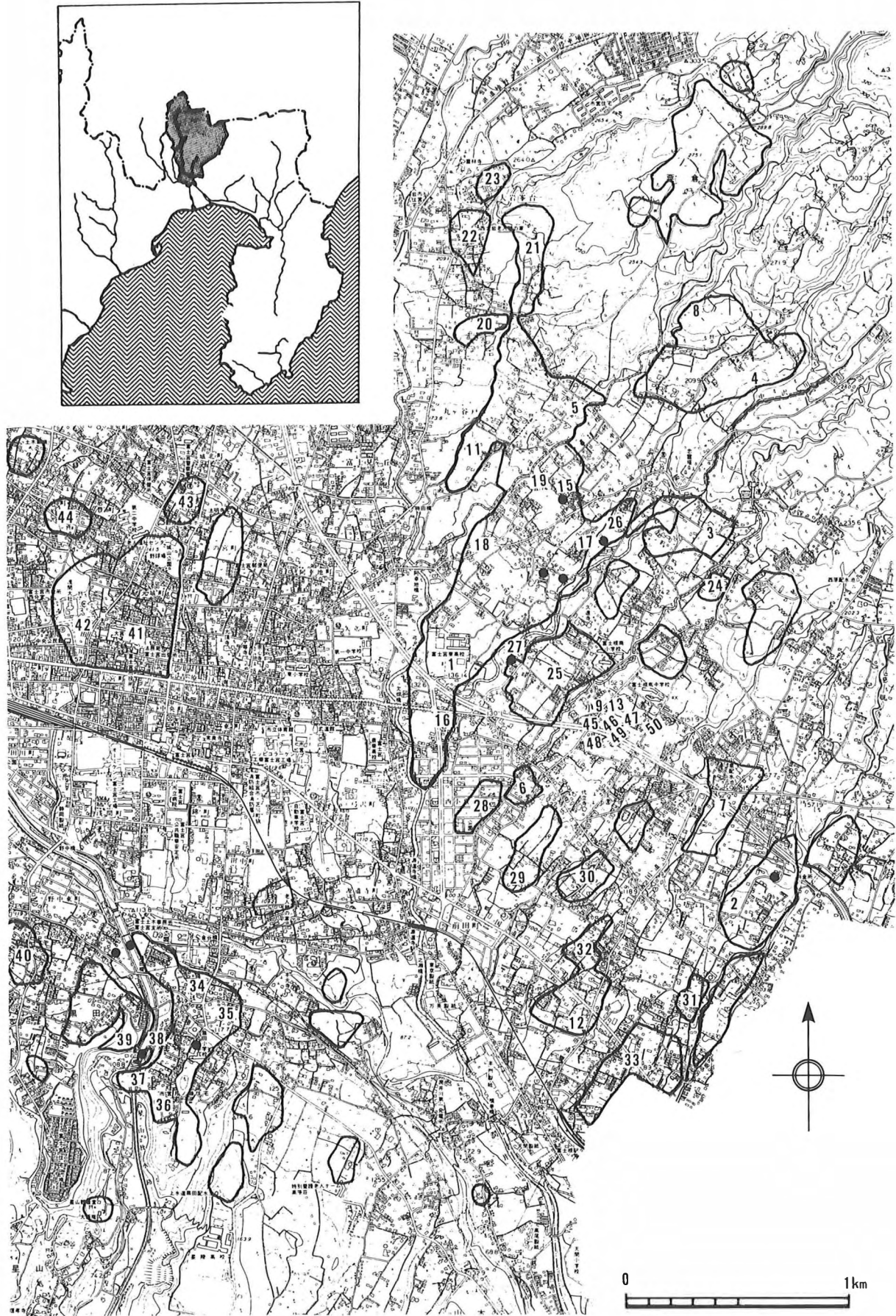
番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	木ノ行寺遺跡	縄文(中・後)、古墳		23	峠ヶ谷戸遺跡	縄文(前・中)、古墳	
2	若宮遺跡	縄文(早)	集落	24	出水東遺跡	古墳(前)	
3	出水遺跡	縄文(前・中)、古墳		25	寺内遺跡	縄文(前・中)、古墳	
4	箕輪B遺跡	縄文(早～後)、古墳		26	神祖山ノ神古墳	古墳(後)	円墳
5	峯石遺跡	縄文(前～後)、奈良	奈良時代集落	27	寺内山ノ神古墳	古墳(後)	円墳?
6	上石敷遺跡	旧石器、縄文、奈良	奈良時代集落	28	向田遺跡	古墳(前)	
7	代官屋敷遺跡	縄文(早～中)、古墳		29	石敷遺跡	古墳(前)	
8	箕輪A遺跡	縄文(中・後)、古墳		30	荻間遺跡	古墳(前)	
9	杉田中村遺跡	縄文(中・後)		31	蟹入越遺跡	縄文(中・後)、古墳	
10	滝ノ上遺跡	縄文(前～後)		32	上宿遺跡	縄文(早・中)、古墳	
11	丸ヶ谷戸遺跡	縄文(中・後)、古墳	前方後方型周溝墓	33	川坂遺跡	奈良～平安	
12	権現遺跡	古墳(前)、奈良		34	南都谷戸遺跡	縄文、古墳	方形周溝墓
13	泉遺跡	弥生(後)～平安	古墳時代後期集落	35	五反田遺跡	縄文(中)、古墳	
14	別所稲荷塚古墳	古墳	円墳	36	月の輪上遺跡	縄文、弥生、古墳	弥生時代集落
15	大室古墳	古墳(後)	円墳	37	月の輪平遺跡	旧石器、縄文、古墳	古墳時代集落
16	中沢遺跡	古墳・奈良		38	月の輪下遺跡	古墳(前)	集落
17	神祖遺跡	縄文(早・中)、古墳		39	坊地南遺跡	古墳(前)	
18	三ツ室遺跡	縄文(前)古墳(前)		40	野中中村遺跡	縄文(中)古墳(前)	
19	大室遺跡	縄文(中・後)、古墳		41	大宮城跡	室町	城館
20	時田遺跡	縄文(中・後)、古墳		42	浅間大社遺跡	中世～近世	神社
21	辰野遺跡	縄文(晩)、古墳		43	城山遺跡	古墳(前～後)	
22	宝田遺跡	縄文(中・後)、古墳		44	二ノ宮遺跡	古墳(前～後)	

第1表 周辺の遺跡

があり、徐々に標高の低い所までその分布域を広げている。中期後半以後後期前半までは遺跡の東側への面的な広がりが認められ、杉田中村遺跡(9)、滝ノ上遺跡(10)、富士市天間沢遺跡などの有力な遺跡が大淵溶岩流の縁まで進出し、広範囲の平坦面が確保される丘陵上に大規模な集落を築くようになり、最も盛行した時代を迎える。

古墳時代は、その前期の大廓式土器段階に、前方後方型周溝墓が確認されている丸ヶ谷戸遺跡(11)や環濠を伴う上石敷遺跡の集落、掘立柱建物と竪穴住居が確認されている権現遺跡(12)など弓沢川左岸の中下流域に多くの遺跡が確認され、突如として爆発的な広がり示すようになる。木ノ行寺遺跡でも遺構としては発見されなかったが、大廓式(古)段階の高坏が検出されている(第19図5)。

この古墳時代前期の隆盛が嘘のように以後、富士山西南麓では中世以後の民衆信仰としての浅間信仰が本格化する時期まで衰退期を迎える。ただ、古墳時代後期から平安時代にかけて古墳時代～平安時代の泉遺跡(13)、古墳時代後期の別所稲荷塚古墳(14)の所在する大中里周辺とこの木ノ行寺遺跡や古墳時代後期の大室古墳(15)、奈良時代集落の上石敷遺跡、権現遺跡、峯石遺跡などが所在する小泉、大岩地区では、遺跡の経営が確認されており、やや限定された範囲ながら生活の痕跡は窺える。これらの地域の内、特にこの小泉、大岩地区の各遺跡は、奈良時代8世紀前半代での消長が認められる集落遺跡で、さらに限定した時間幅でしか経営されていなかったようである。弓沢川に滝沢川、大沢川が合流し、大幅に弓沢川の水量が増す地域から弓沢川が潤井川に合流するこの木ノ行寺遺跡の周辺は、弓沢川左岸沿いに展開する小泉、大岩地区の中でも集中して、この段階の遺跡が認められる地域で、上記の遺跡の他に中沢遺跡(16)などでも当該期の資料が採集されている。



第4図 周辺の遺跡

3. 層序

木ノ行寺遺跡は、周囲を弓沢川、大沢川、中沢川に画された比較的平坦な地形が連続する丘陵の南端に位置している。同一の地域には神祖遺跡(17)、三ツ室遺跡(18)、大室遺跡(19)などの類似した性格をもつ遺跡があり、古墳時代後期の古墳群を包括する大きな遺跡群を形成しているようである。

木ノ行寺遺跡の標準的な層序は、過去に調査された上石敷遺跡や丸ヶ谷戸遺跡などの周囲の遺跡と同一のものと考えられ、富士山に近接する度合いでスコリアの堆積幅とその混入の多さに違いを示している。層序は表土→大沢ラピリ（弥生時代以降の遺構確認面）→黒褐色土（黒ボク）→栗色土（縄文中期包含層）→富士黒土→黄褐色ローム質土→古富士泥流と分層されるが、今回の調査地点は前述のように高校建設時の造成で、大半の掘削が黄褐色ロームまで及んでおり、標準的な土層が確認される部分はなかった。唯一、遺構の残存する台地の縁辺から谷部にかけて栗色土～黒褐色土の一部が確認されるにすぎない。

参考文献

- 渡井英誉 1994 a 「第II章 遺跡の位置と地理的環境」『月の輪遺跡群IV』富士宮市教育委員会
- 渡井英誉 1994 b 「I. 遺跡の立地」『峯石遺跡』富士宮市教育委員会
- 遠藤英男 1988 「湧水」『富士宮市の自然』富士宮市

第三章 遺構と遺物

木ノ行寺遺跡は、学校建設時の削平で調査対象地内が壊滅的な状況であったが、幸いに造成事業範囲のほぼ中央で遺構の残存が確認され、遺跡の概要が知れる資料を得ることができた。

調査を実施した地区では、6世紀～7世紀にかけての集落（第5図）と、江戸時代前半の水田跡（第6図）が確認され、2時期にわたる土地の利用の様子が浮き彫りにされた。集落関係では竪穴住居2軒、竪穴遺構1基、溜井1基、溝2条があり、江戸時代前半の水田では、溝3条、土坑3基、土壇（墓）2基などが確認されている。

1. 遺構と遺物

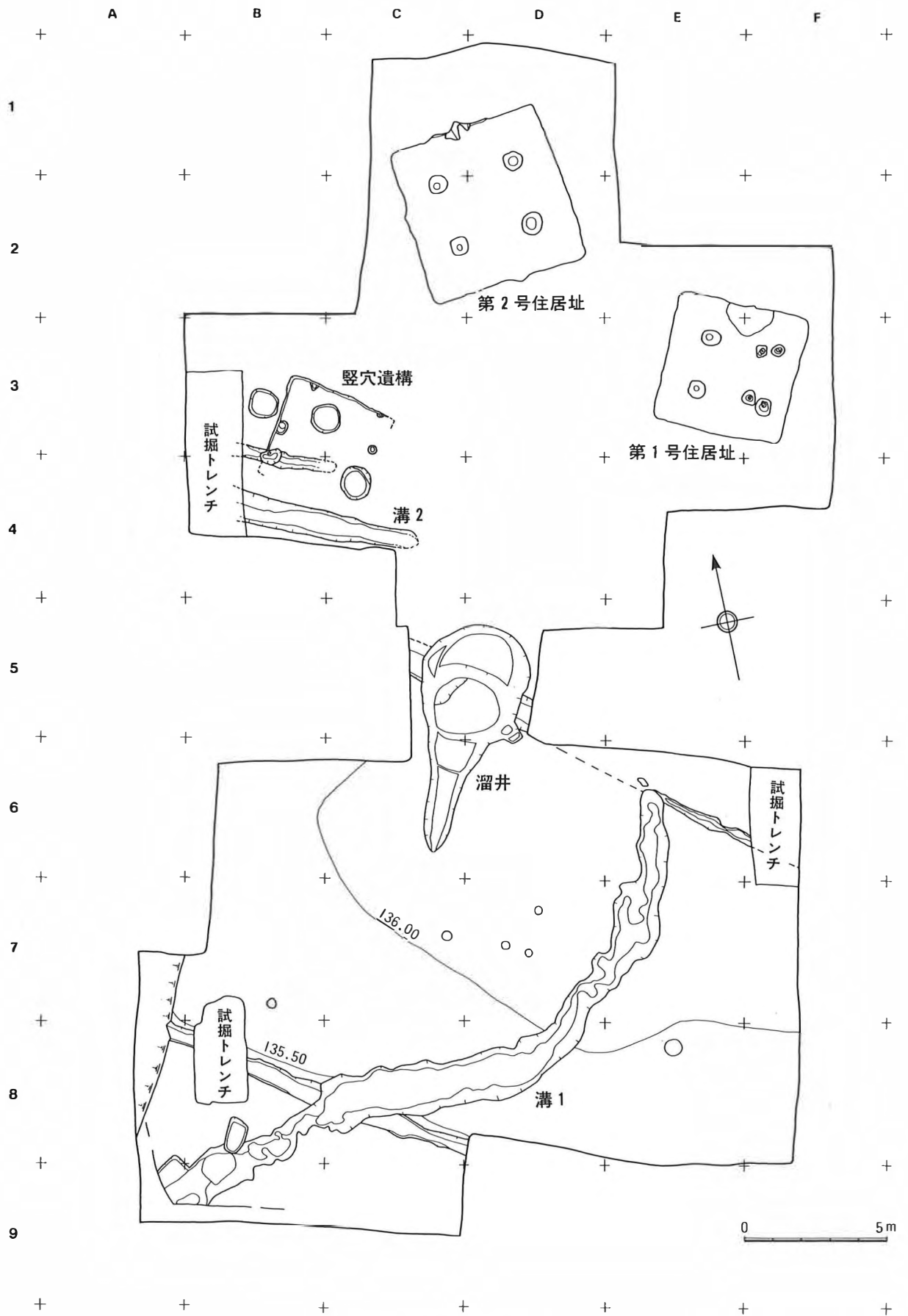
竪穴住居

第1号住居址（第7図）

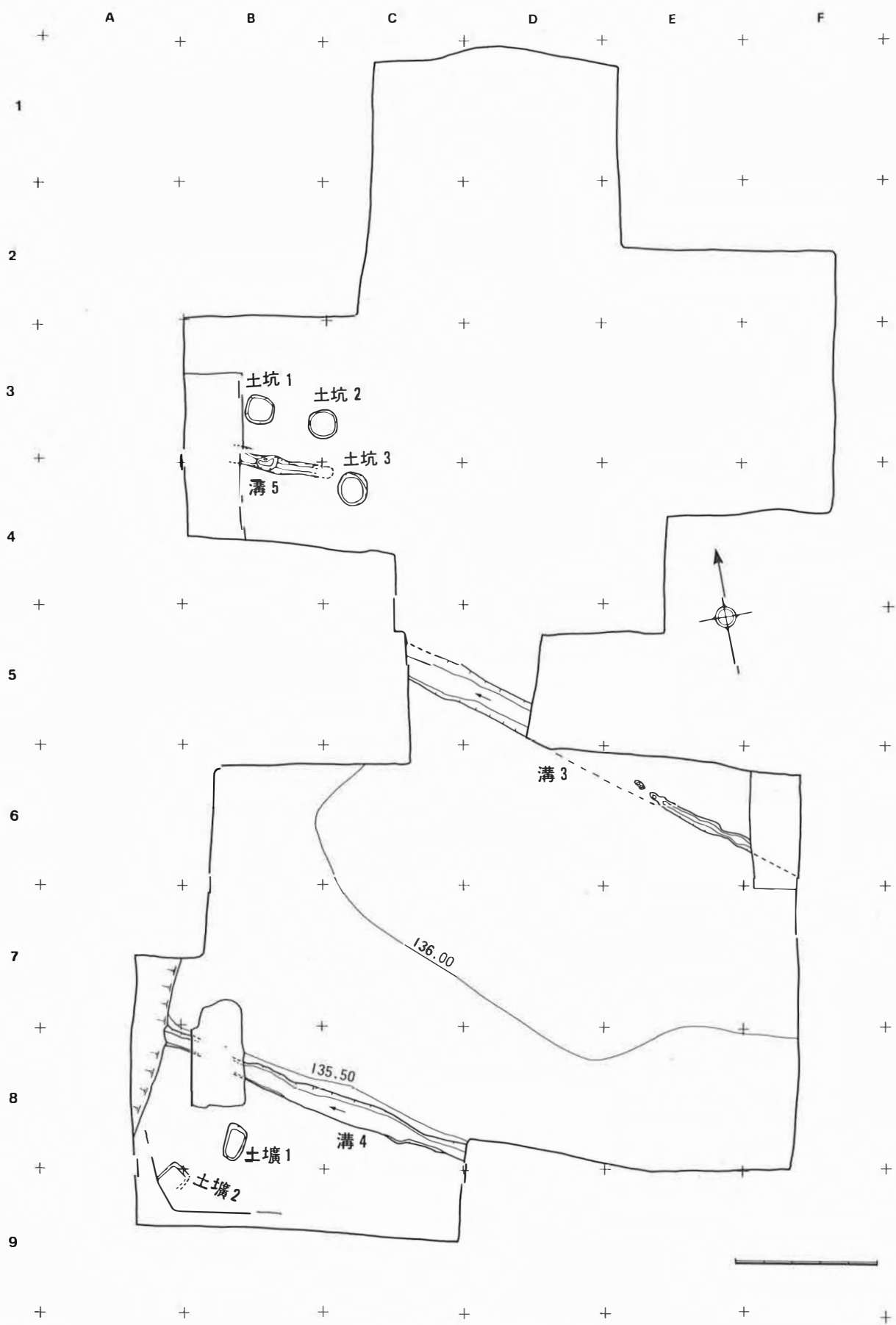
〈構造〉

E-2・3、F-2・3に位置する竪穴住居で短軸（主軸）465cm、長軸470cmの規模を有し、ほぼ正方の平面形を示す。かまどは北壁に認められ、主軸方位N-22°-Eを取り、後述する第3号竪穴址とほぼ同一の方位的な傾きを示している。学校建設時の削平が著しく進行しているため、住居の壁はほとんど認められず、遺構の確認面で既に床面あるいは掘り方が認められる状況で、住居の残存状態は極めて悪い。付属する施設としては、かまどと柱穴が確認されている。特徴的な配列を示す6個の柱穴は、西側に2個（P1、P2）と東側に4個（P3、P4、P5、P6）で住居の中で偏在する位置にある。西側は住居建築から廃絶まで機能していた柱に伴うものであるが、東側のものは柱間の狭いもの（P3とP4）と広いもの（P5とP6）の2組が認められる。住居の平面形からはP1、P2、P3、P4が対応しているようで、規格的で、建築当初の姿かと思われる。この4個の柱穴は相関関係が強いようで、配列は元より、それぞれの掘り方の深さも床面から50cm前後の近似した値を示す。西側の最も外側にあるP5とP6は、それらよりやや浅くなり40cm弱の深さを示す。この2個も配列から柱穴として捉えられるとともにP3→P5、P4→P6の関係がそれぞれ考えられ、柱の作り替えが指摘できる。ただ、住居全体の形からは、平面的な広がりには観察できず、住居の拡張などが実施された痕跡は認められない。そのような状態のなかで、かまどの位置がやや西に寄って、外側の柱列に対応しそうな点は、住居が使用途中で、かまどおよび上屋を中心として、改築されたものと推察されるものであるが、その具体的な変化については分からない。

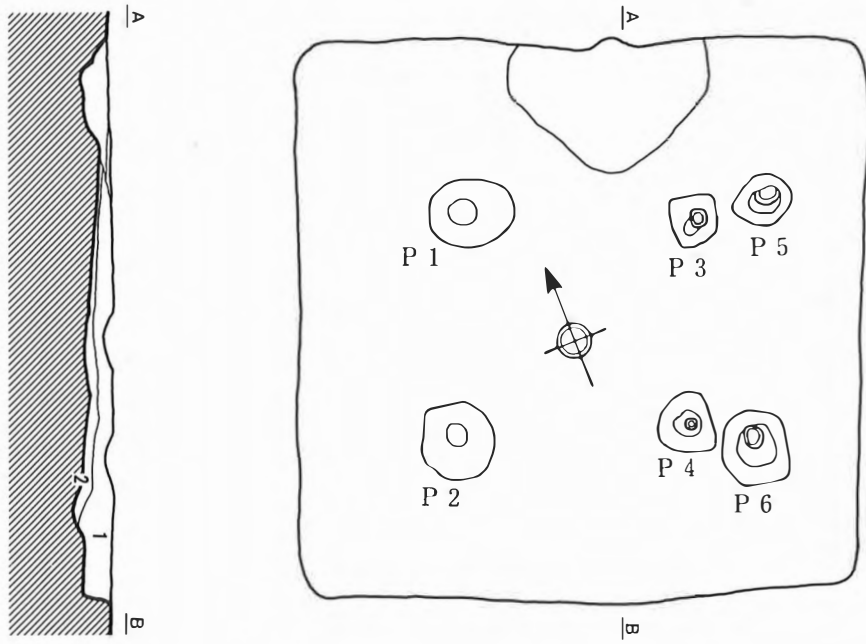
かまど（第8図）は、北壁の中央やや西寄りに構築されている。再三述べているように残存状態は悪く、構造の主となる部分は一切分からず、掘り方の形態のみ確認したにすぎない。掘り方は深さ20cm、幅180cmの範囲に認められ、扇型で擦り鉢状の形状を示し、その中には焼土や炭化物を含む黄褐色粘土が充填されている。掘り方の中央部には小ピット



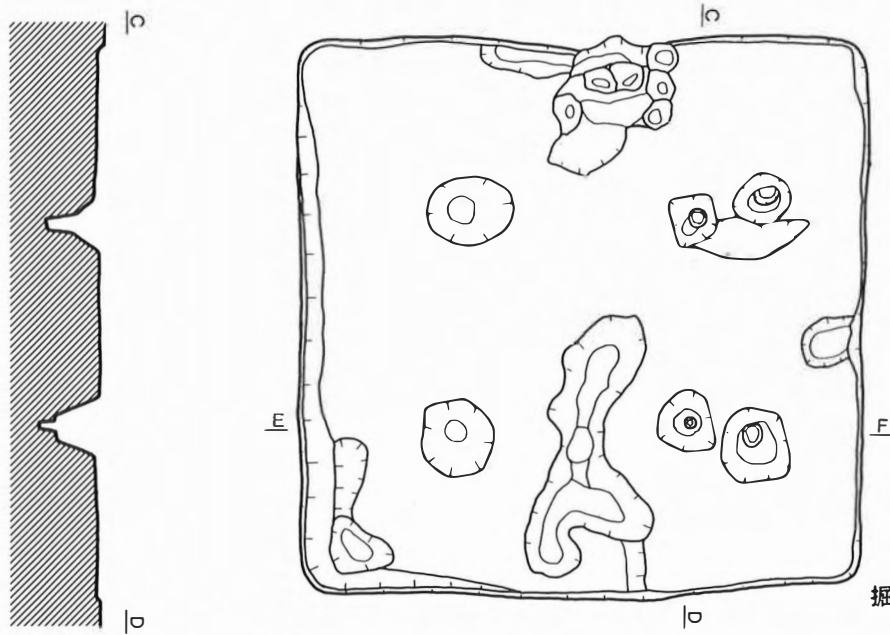
第5図 遺跡全体図①



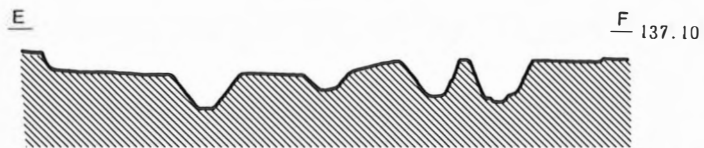
第 6 図 遺跡全体図②



- 1. 黒褐色土スコリアが多い
- 2. 黒褐色土



掘り方



0 1 m



1



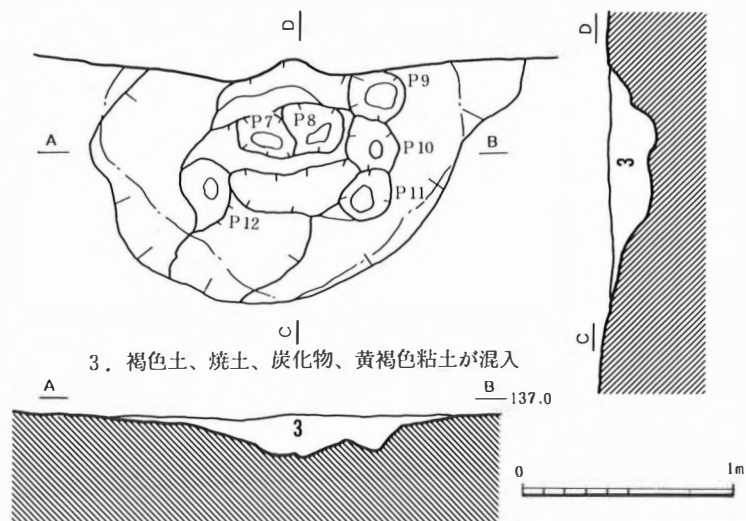
2



0 5 cm

第7図 第1号住居址

が6個（P7～P12）穿たれているが、P7、P8は、燃焼部に対応する位置にありやや深く掘り窪められ、P9～P11は右袖部に対応し列状の配列を示す。P11とP12はそれぞれ袖部に関連するピットであるが、他のピットより10cmほど深く、明瞭な掘り込みが認められるものである。



第8図 第1号住居址 かまど

これらは、その位置や形状より袖の補強に使用されたと考えられる補強材が設置されていた可能性のあるピットである。そして、これらピットに補強材が存在しないのは、住居廃絶時のかまど的人為的破壊行為（堤1993）に関連し、既に補強材が抜き取られた跡であると想定されるものである。

住居の掘り方は、西側部分をやや深くしながら住居全体を掘り込んでいるが、入口部から中央部にかけてやや深く掘り窪められた長楕円形の部分が認められる。

〈遺物〉

出土遺物は、土師器片と須恵器片であるが、大半は土師器片で、甕の破片が目立つ。また、土師器の内、坏類は、黒色処理されたものが多く見受けられる。

1は駿東型甕の底部破片で、内外面ハケ調整が施される。底径は9cm程度で、その底部には木葉痕が認められる。2は底径4.6cmを測る甕あるいは鉢の底部破片で、その外面はタテ方向のヘラケヅリによって整形されている。

この住居出土の土器類に明確な年代が想定されるものは存在しないが、陶邑TK217段階と思われる須恵器坏蓋の小破片が認められる。

第2号住居址（第9図、第10図）

〈構造〉

C-1・2、D-1・2の調査区北側中央部に位置する竪穴住居で、長軸（主軸）600cm、短軸574cmを測るやや長方形の平面形を示す。覆土は、住居の中央部にスコリアを含む暗灰褐色土の堆積が、厚さ12cm程度で認められるが、全域までは確認されない。そのため、住居の壁は残存していない。かまど部分に張り出し部が認められるほか、南壁中央部分も80cmの範囲に幅20cmで張り出しており、入口部に関連したものと考えられる箇所が認められる。

かまどは北壁にあり、住居の主軸方位N-12°-Wを示す。付属する施設は、このかまど以外に柱穴が確認されている。柱穴は、規格性の強い4本柱で、かまどを通る中心軸

(主軸) から左右ほぼ対称に配されている。柱穴はその掘り方で、それぞれ深さ50～60cmを測る非常に堅固な造りになっている。

かまどは、住居の壁に近い部分で、両袖が補強材の石とともに構築されている状態で確認される以外は残存していない。また、張り出し部には、煙道の残存部かと思われる厚さ10cmの粘土の上に甕の破片が、面的に敷かれている部分がある。燃焼部に相当する部分には、焼土の分布が幅50cm程度にわたって認められる。焼土は厚さ8cmを測り、比較的使用頻度の高いかまどと理解される。

かまどの掘り方は、燃焼部に相当する部分を深さ25cm程度に掘り窪めた不整形円で、前面に並列する小ピットが2個確認されている。このピットは、掘り方の底面よりさらに7、8cm掘り込まれたもので、径15cm程度を測る。第1号住居址同様、これらは袖部構築の際の補強材を設置した痕跡と捉えられるが、それらの位置関係より、石などを補強に使う構造とかまど全体の大きさを想定することができるものである。

かまどの残存状態は、遺跡全体の状況の悪さを踏まえても前面と壁際、張り出し部とでは大きく状況を違えている。前者は補強材の残存が認められないのに対して、後者は比較的良好な状況でそれが残り、粘土もそれに対応して極めて偏在する分布を示している。これらの事象は、かまどの主となる燃焼部と袖部の大半を人為的に破壊する住居廃絶時のかまど祭祀の結果として捉えられるものであろう。

住居の掘り方は、かまど西側から西壁～南壁にかけて、その壁際に幅60cmほどの溝が巡っている。これは入口部と思われる張り出し部分に対応するようにその両側に掘り残し部分があり、住居建築時から意識して、この部分が造作されたことが分かる。ただ、掘り方内の掘り残し方や張り出し部の形状より、この部分がかまどの作り替えによるものである可能性も考えなければならないが、南壁部分でかまどに関するような粘土、焼土、炭化物などは確認されていない。

また、このような溝状の掘り方以外に北東隅部分もやや掘り窪められている。

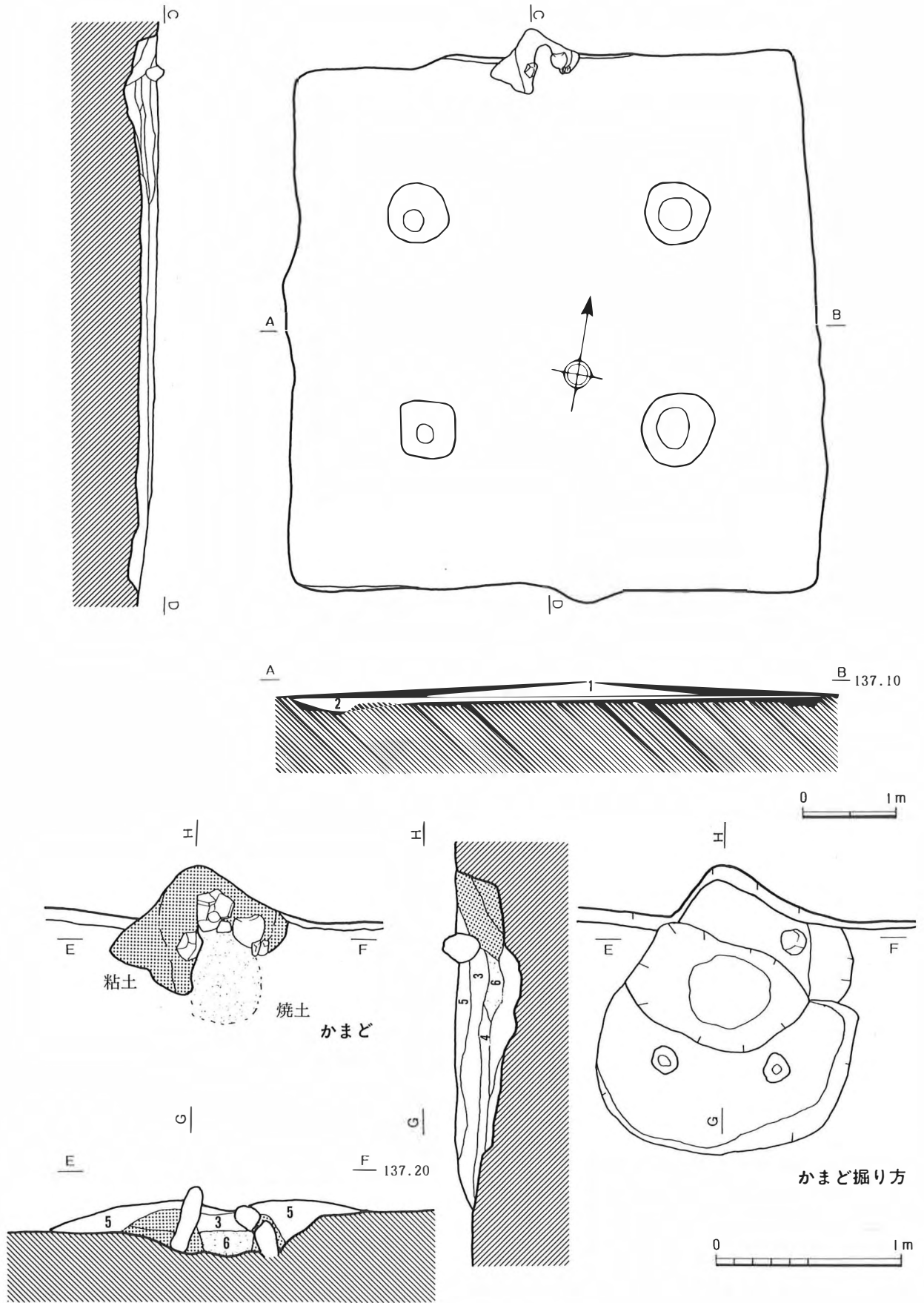
〈遺物〉

この竪穴住居は、残存状態の悪い遺構ではあるものの比較的多くの遺物が検出されている。遺物は全て土器で、須恵器と土師器から構成される。土器は8割以上が駿東型の甕の破片で占められるが、図化できるものはあまりない。坏は土師器坏の約2/3の破片に黒色処理の痕跡が認められる。いずれの出土土器も破片資料ではあるものの、この住居の大まかな時代設定を可能にしている。ここでは図化できた資料について解説する。

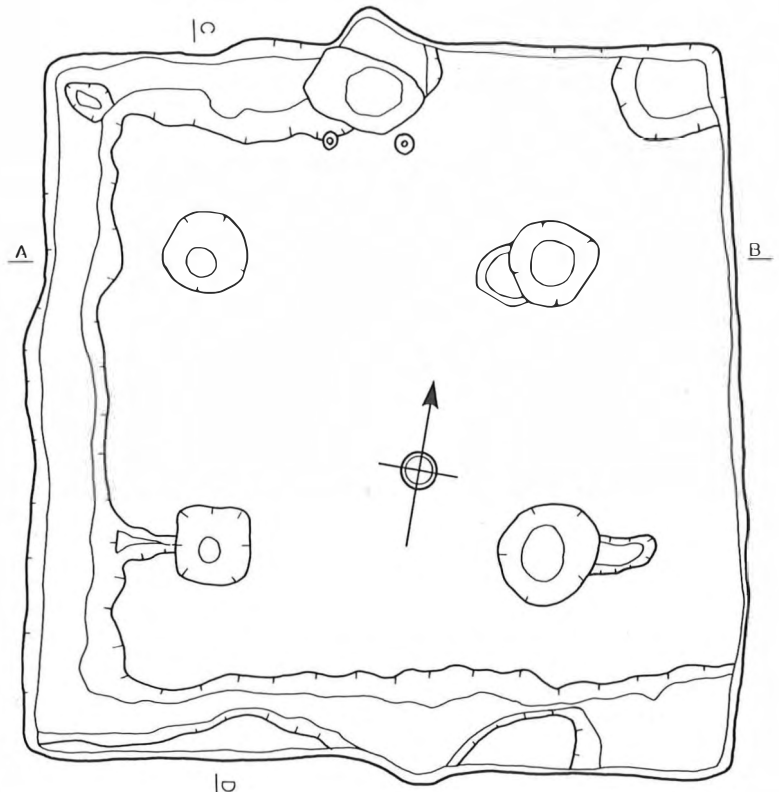
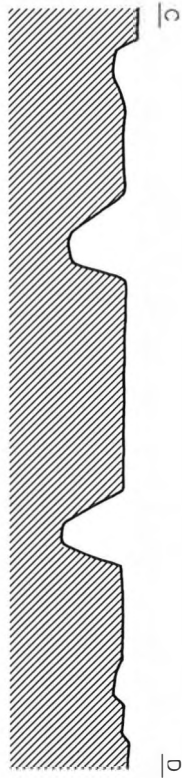
須恵器坏は、身と蓋が認められる。1は坏蓋で口径8.2cmを測り、2は口径7.3cm、受部径9.1cmを測る小型の坏身と思われる小破片である。3、4はそれぞれ口径8.5cm、受部径10.4cmと口径9.0cm、受部径10.9cmを測る坏身の破片で類似した形態を示す資料である。

第2号住居址 土層

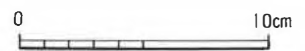
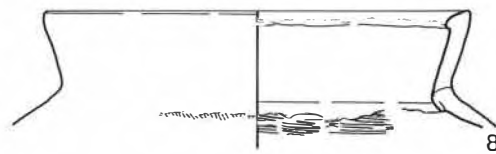
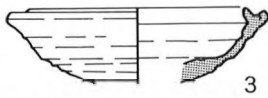
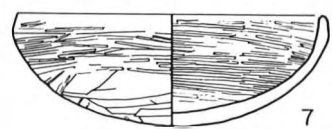
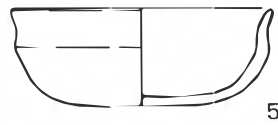
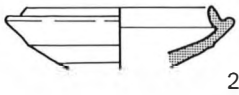
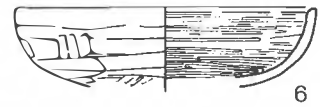
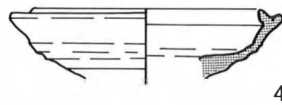
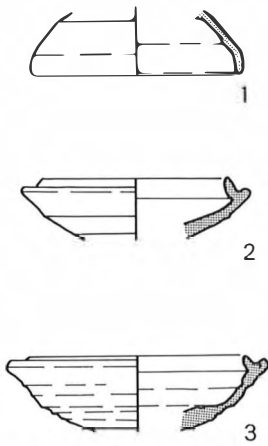
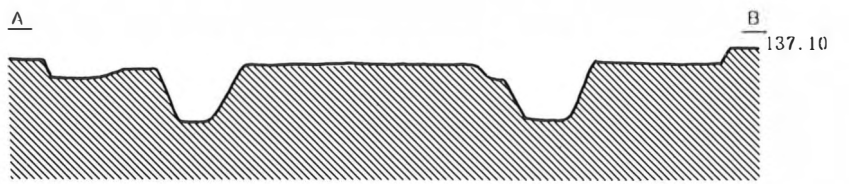
- | | | |
|-----------------------|---------------|-------------|
| 1. 暗灰褐色土 | 2. 暗褐色土 (掘り方) | スコリアの混入が多い。 |
| 3. 暗灰褐色土 粘土、焼土粒子が目立つ。 | 4. 暗褐色土 | 5. 暗褐色土 |
| 6. 暗灰色土 焼土の混入が顕著。 | | |



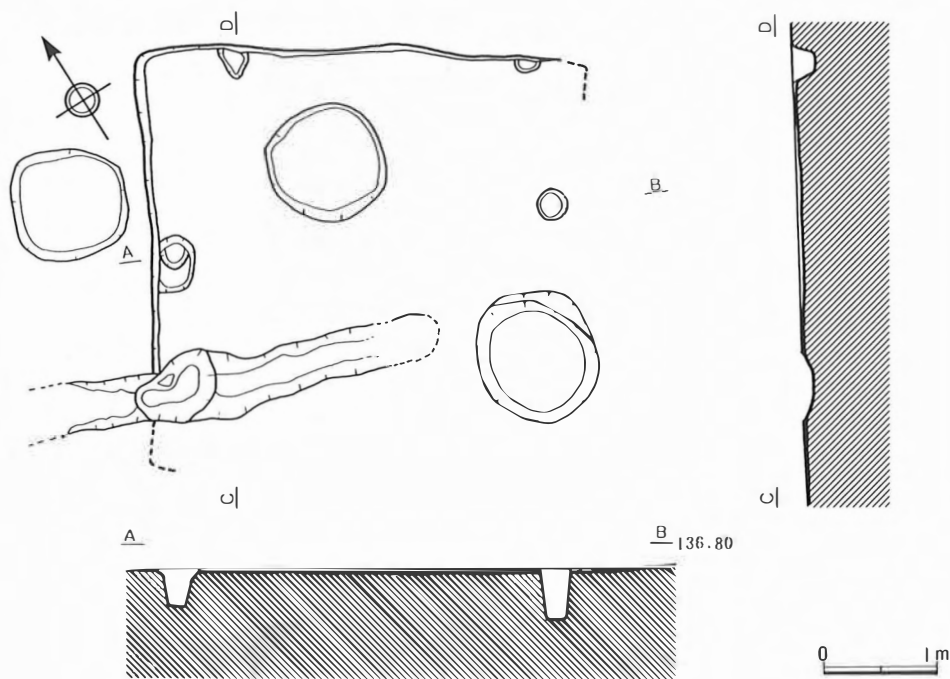
第9図 第2号住居址①



掘り方



第10図 第2号住居址②



第11図 竪穴遺構

土師器坏は、5の須恵器の模倣と思われるものと、6、7の椀状のものが認められる。5は口径10.4cm、器高4.0cmを測る坏で、底部をやや平底気味に作り、木葉痕を残す特徴的な形態を示す。6は、口径11.8cmを測る坏で、内外面とも黒色処理が施された上に、内面が細かい丁寧なヨコヘラミガキによって整形されている。7は、かまど前方部分から出土した口径12.1cm、器高4.5cmを測る椀形土器で、外面体部上位と内面の底部以外に細かいヨコヘラミガキを施している。

8は、口縁端部を面とりしながら内側に肥厚させるやや器厚の厚い甕で、口径17.0cmを測る。この資料を含めこの住居から出土する甕は、全て駿東型の甕で占められており、主体的な煮沸具として盛行している状況が窺える。

竪穴遺構（第11図）

〈構造〉

B-3・4、C-3・4に位置する竪穴遺構であるが、覆土や床面は残存せず、南壁、東壁などもすでに消失しており、全体の状況は把握されない。また、かまどなどが認められないことから一般的な住居とも考えにくい。この遺構は、近世に比定される土坑3基とこの遺構内で掘り方が消失する同じく近世の溝1条が重複している。掘り方の残存する部分から推定すると規模は、南北360cm、東西400cm程度を測る。掘り方は北壁の中央やや西側を10cm程深く掘り窪めている以外、全体的に平坦な掘り方を構築している。ピットは北壁際の東西両側に深さ20cm程の小さなピット2個（P1、P2）と東壁際と西壁際のほぼ中央にそれぞれ深さ40cmほどを測るピット2個（P3、P4）が確認されている。P1とP2に対応するものが、南壁側に存在するかどうかは確認されなかったが、各ピットが壁

際にある点は、全体の上屋構造を考える上で重要であるし、第1、2号住居とその構造や用途が違うことを端的に表している。この遺構は、確認された面が栗色土で、本来の確認面より30~40cm深いことから、竪穴状のものであったとは考えられるものの、調査で得られたデータはその状態の悪さから決して多いものではなく、建物としての具体性はあまり追求できないが、P3とP4の位置関係から、それぞれを妻部分にある棟持柱とした切妻造りの建物が想定されるものである。そうすると、P1とP2は側壁または切妻造りの屋根に対応する柱穴であろうか。

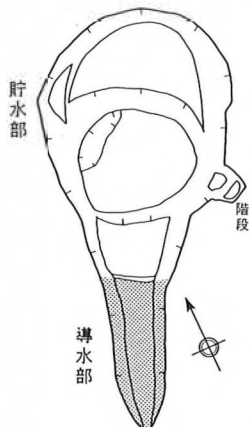
厨房施設を持たない切妻造りの竪穴状の建物として、この遺構は、納屋などの貯蔵施設として捉えておくと、土器など遺物の出土はほとんどなく時代的な位置づけなどはできない。ただ、建物の方向からは第1号住居との有機的な関係が窺われるとともに、家屋としての居住空間と貯蔵空間といった組み合わせを考えなければならない。

溜井（第12図、第13図）

〈構造〉

自噴による湧水を貯水しながら給水を計る農業施設である溜井（能登他1983）と思われる土坑が、1基確認されている。これは、遺跡の占拠している台地の縁辺にあたる調査区の中央C-5・6、D-5・6に位置し、地形的な傾斜に対してほぼ直交で、N-23°-Wの方向を向いている。この方向は、ほぼ第1号住居や竪穴状遺構とも同一で、それらとの関連も十分考えられるものである。

この溜井は、近世の溝によって切られているものの、比較的整った形をしており、人為的な構造物であることをよく表している。溜井は、貯水部と導水部とから構成される施設として捉えられているが、この場合は、長径538cm、短径370cmを測る無花果型の貯水部と貯水部の長径から延長された幅110cmの導水部とから成り、それぞれ深さ170cmと90cmを測るものである。導水部の水路は293cmの長さが調査で計測され、徐々に南側の先端に向かって浅くなる形態であるが、本来の大沢ラピリ上面での確認面ならば、それはさらに延長され、台地斜面部まで及ぶものと考えられ、その先には台地の斜面に沿って排水できるような水路が付されていたものと考えられる。

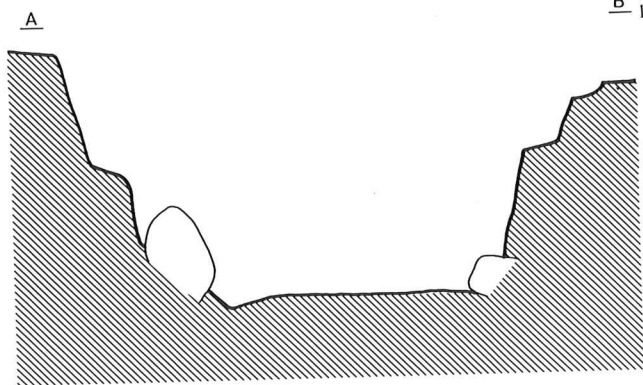
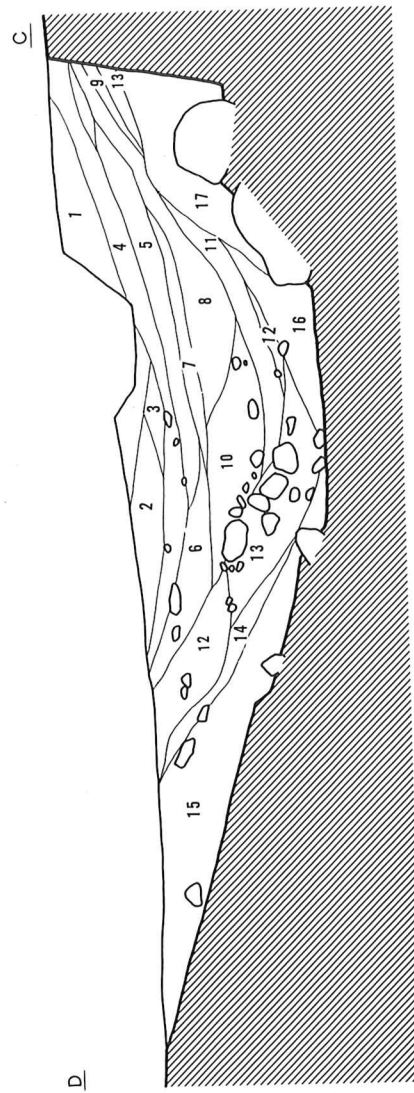


第12図 溜井の各部位

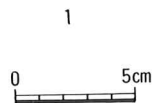
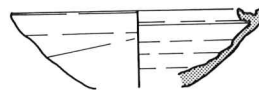
貯水部は古富士火山の泥流層まで掘り窪められて構築されており、その下部で泥流層に伴う大型の礫が多く露呈している。これは、第II章で述べたように富士山の重層構造によって湧水が発生

溜井 土層

- | | | | |
|-----------|--------------------|-------------------|----------|
| 1. 暗灰褐色土 | 2. 暗褐色土 | 3. 灰褐色粘質土 | 4. 暗灰褐色土 |
| 5. 暗褐色土 | 6. 暗灰褐色土 | 7. 暗灰褐色土 | 8. 褐色土 |
| 9. 暗褐色粘質土 | 10. 褐色粘質土 | 11. 暗褐色粘質土 | |
| 12. 褐色土 | 13. 暗褐色土（礫の混入が多い。） | 14. 黒色土 | |
| 15. 褐色土 | 16. 黄褐色土 | 17. 黄褐色土（ロームブロック） | |



B 136.60



第13図 溜井

する地質的なメカニズムを利用し、周辺に認められる自然の湧水地を旨く模した構造物といえる。また、確認はされていないものの眼下に展開したであろう田畑に、導水路を通して供給された水のほかにも、台地上に展開する集落に対しても、貴重な水の供給源となっていたようで、この溜井の貯水部南東側には幅70cmを測り、上段で高さ8cm、下段で37cmを測る階段状の施設が付されている。

溜井の覆土は、導水部の覆土と初期の三角堆積は別として、概ね台地の上からの流れ込みによると思われるもので占められる。そのため、貯水部の南側に流れ込みによると思われる礫の堆積が比較的多く認められた。

〈遺物〉

遺構の性格上、遺物の量は少なく、直接関連するものはない。覆土上層に近世陶磁器が若干認められるほかは、大半が7世紀代の土器で占められる。1は図化できた唯一の資料で口径8.3cm、受部径10.5cmを測る須恵器坏で、底部に直線3本のヘラ記号が認められる。

溝

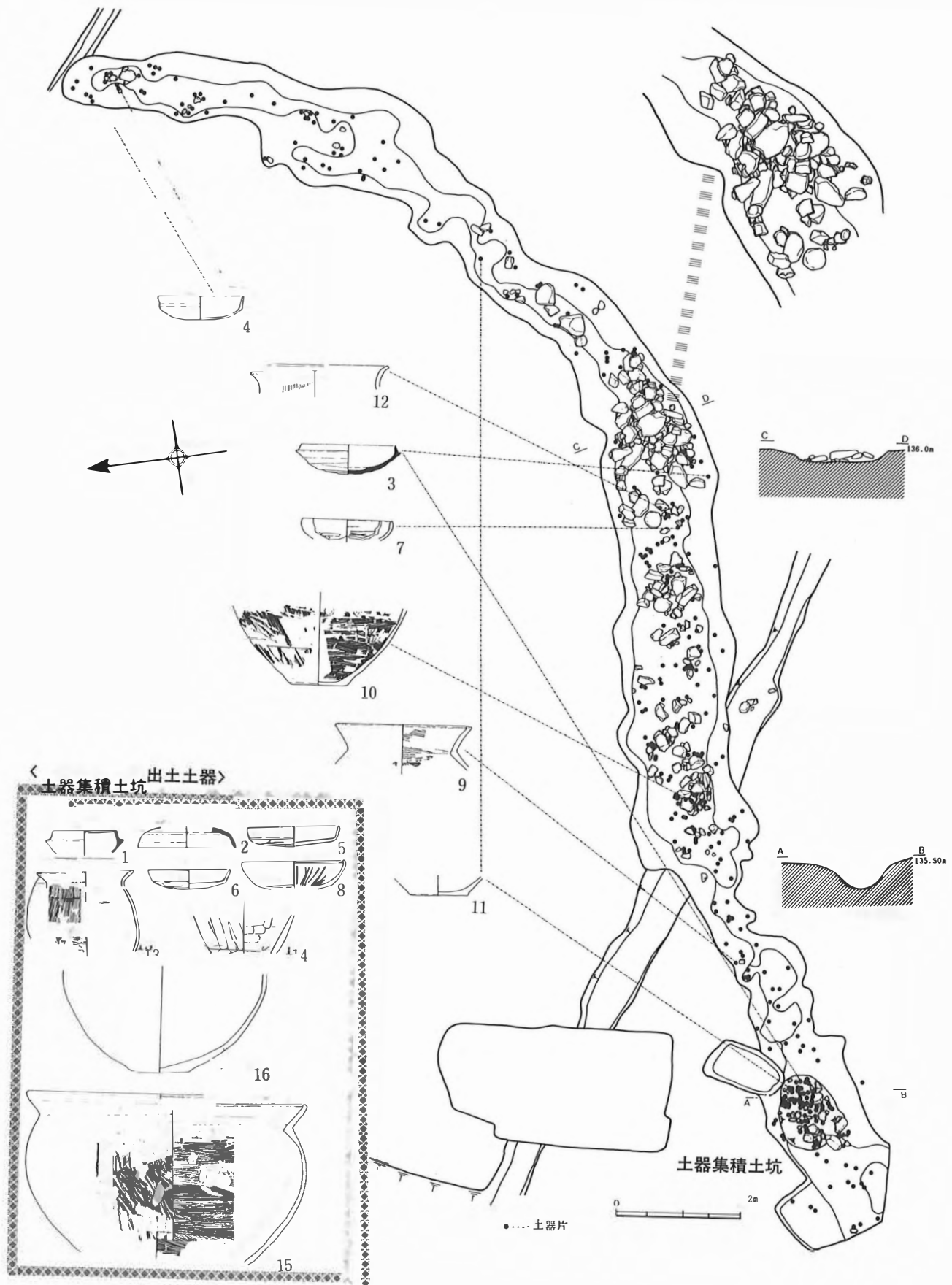
溝は全部で5条確認されているが、溝1、2が古墳時代のもので、その他が近世に比定される。

溝1（第14図、第15図、第16図）

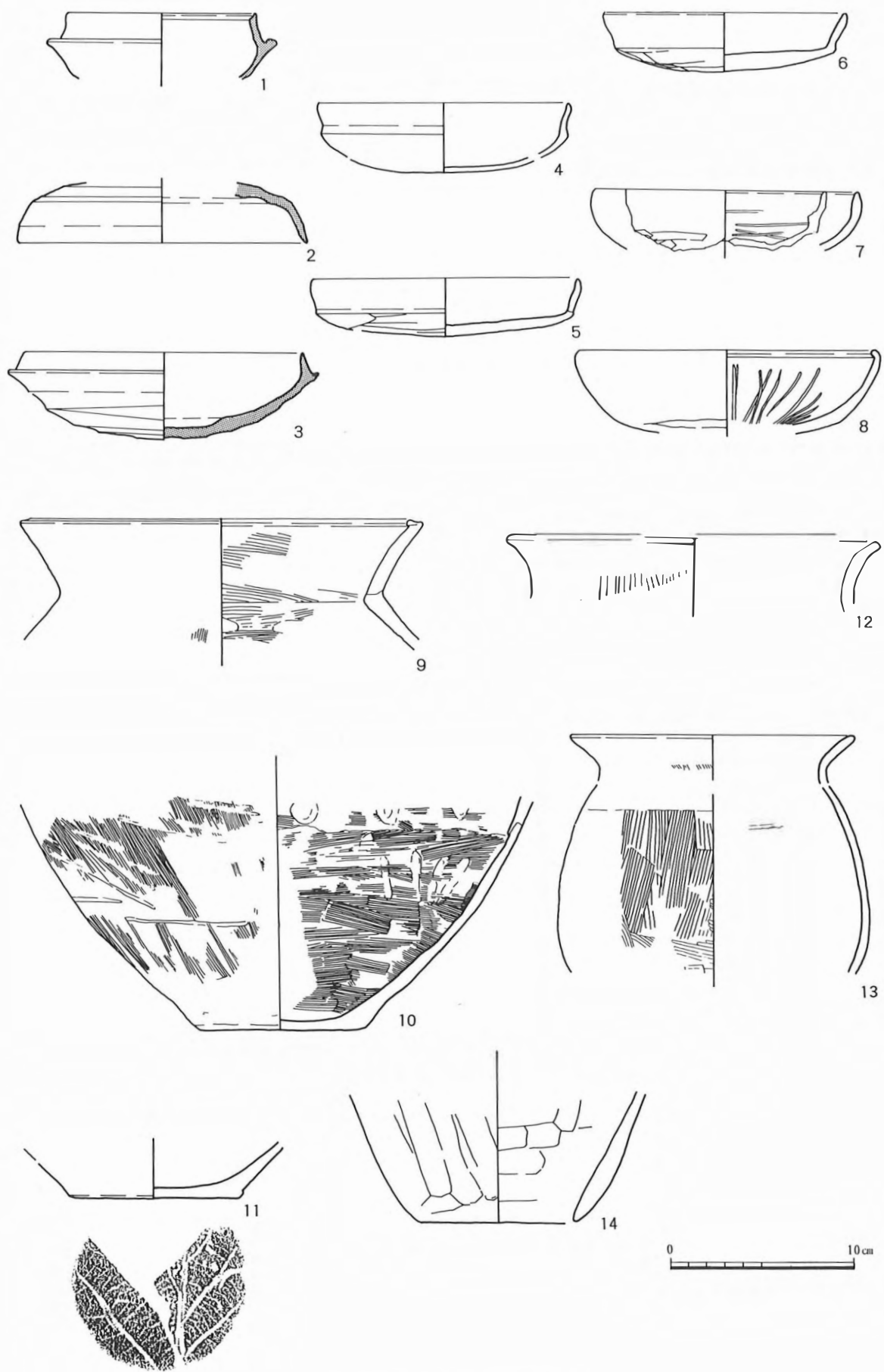
〈構造〉

調査区の南半部を大きく弧状に巡る溝状の遺構で、近世の溝2条と方形土塙2基と重複して全長25m程が確認されている。北側部分は、さらに台地上に向かって延びていくものと思われるが、調査区の残存状況の悪さから、近世の溝と重複するE-6付近で、その掘り方が消失している。また、確認された部分がすでに溝の底面付近のため、溝の幅も一定ではなく各地点で大きく数値を違えている。溝の断面形は「L」状を示し、残りのよいC-8付近で最大幅190cm、深さ15cmを測る。

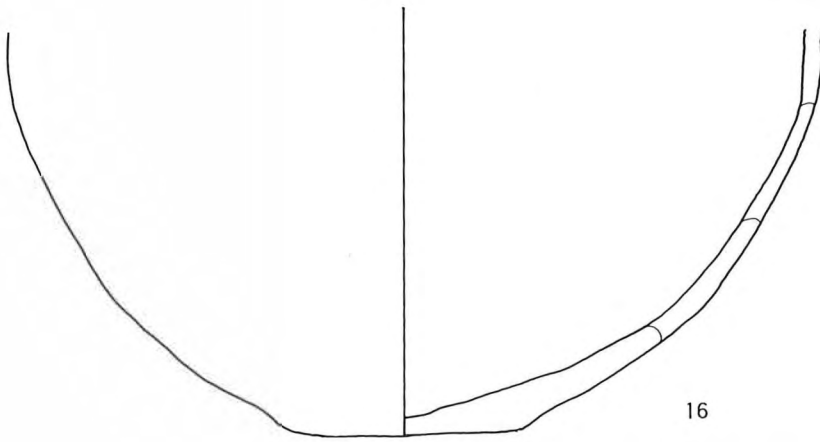
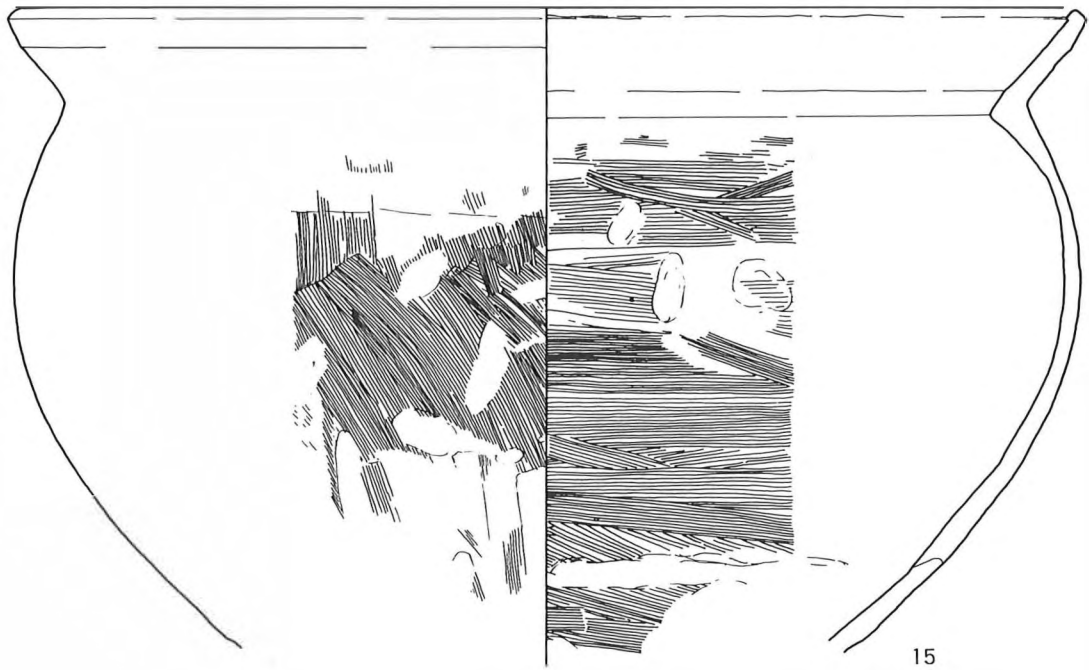
台地の縁辺から台地斜面にかけて確認されているこの溝は、B-8とD-8とに屈曲部が認められ、それぞれ直線的な線の組み合わせにより構成されていることが観察される。北から便宜的にI区、II区、III区に分けて捉えてみる（第17図）。I区とIII区は確認された掘り込みも比較的浅く壁面が蛇行しながら、ほぼ地形的な傾斜に沿っている様子が窺われる。II区は東西方向に位置し、最も残存状態が良く、溝の幅も広い。II区とIII区とを画する屈曲部は、それぞれ溝の幅を大きく違えることで認識される。I区とII区との間には、特徴的な石敷きが認められる。石敷きは偏平な石を充填して構築してあるが、その大きさはまばらで、10cm大のものから50cm大のものまで認められる。石が最も集積する部分では、30~50cmの大型の石を面的に並べ、その中を裏込めするように小石を充填し、比較的堅固な造りになっている。石の集中する具合や偏平の大型の石を選択して使用する点などから恒常性の強い構造物かと思われるが、具体性には乏しい。木材などと組み合わせて、溝を区切る機能を持たせたものであろうか。この石敷きの周囲には、これから崩落したと思わ



第14図 溝1 (実測図と土器出土状況)



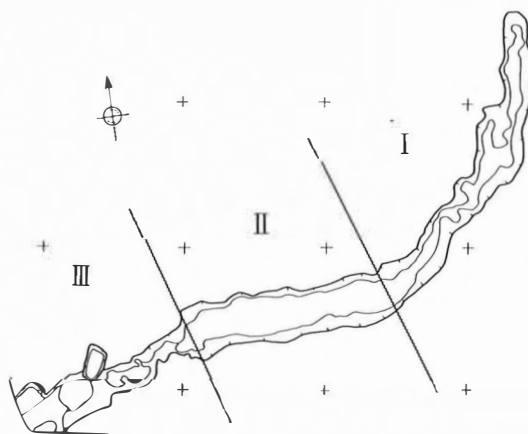
第15図 溝1出土土器①



第16図 溝1出土土器②

れる石が、その南側を中心に散在する。

溝1のIII区南側には径122cm、深さ40cmを測る不整形の土器集積土坑が確認されている。土坑の中には15の大型甕の破片を主体に破片化された多量の土器が認められ、重点的に土器を埋設している状況が窺える。その埋設の状況はほとんど規則性がなく、15~20cm大の石が混入される状況で、甕、坏、甑などの破片が多く出土している。



第17図 溝1の区分

〈遺物〉

遺物は破片資料ながら、多くの土器が確認されている。土器は須恵器と土師器で、甕、坏、甑などが認められる。これらは、台地上からの流下によるものか、この部分に廃棄されたものかは区別できないが、遺構全体に亘ってその分布が認められる。

出土土器は全て破片で、完形のものはない。そのため、出土点数が多い割に図化できるものは少ない。1、2、5、6、8、11、13~16がIII区の土器集積土坑内からの出土で、他のものは溝の覆土中出土の破片資料である。

1は全体の1/8程度の小片であるものの、溝1出土土器の中では古相を示す須恵器破片であるため掲載した。これは、口径10.3cm、受部径12.5cmを推定値ではあるが測り、口縁端部を斜めに切り落とし、そのうえに沈線を巡らしている。2は須恵器蓋の破片で、口径15.7cmを測る。3の須恵器は、溝を区画している石敷きの南東側で検出された破片と土器集積土坑内との破片が接合する資料である。これは、口径15.0cm、受部径17.0cm、器高4.8cmの法量を示す須恵器坏身で、この溝1出土の土器の中では比較的残りのよいものである。4は溝の北端から出土している土師器坏の口縁部破片で、口径13.6cmを測り、内外面とも明瞭に赤彩されている。5は土器集積土坑から出土した口径14.4cm、器高3.2cmを測る土師器坏で、全面に華麗な赤い彩色が施される。6も同じく土器集積土坑から出土の底部外面以外赤彩が認められる土器で、口径13.1cm、器高3.2cmの法量を示す。これは出土地点や赤彩される点、内面が盤状を呈する特徴的な型式を示すなど5の土師器坏とその類似性が指摘でき、用途の共通性が理解される。ただ、口縁端部の形状や赤く塗られる範囲などが違う点は、それぞれの型式差を表しているものと思われる。

7は石敷きの西側で出土した椀形を示す土師器坏の口縁部破片で、赤彩土器である。口径14.3cmを測り、内面に粗くヨコヘラミガキが観察される。8は口径15.9cmを測る土師器坏で、口縁端部を内傾させ、内面に放射状のヘラミガキ（暗文）が施される。

9は溝の西側屈折部付近出土の駿東型甕の口縁部破片で、口径22.0cmを測る。10は同じく西側屈折部の東側において礫と混在する状況で出土した駿東型甕の胴下半の破片で、底径9.4cmを測る。11も10と同じ駿東型甕の底部破片であり、底径9.3cmを測る。ただ、これは接合関係が特異で、溝の東側と土器集積土坑内出土の資料とが途中で石敷きの施設を挟みながら、約14mの間隔を開けて接合するものである。そして、これは途中で立体的な石敷きの施設を介することで、この土器破片の関係が流水などによる自然の作用によるものでなく、人為的な行為によるものであることが分かる。これにより、人為的に土器を溝中

の土坑に埋設する行為とその破片の一部を溝の他の部分に廃棄する行為が、施行されたものと理解される。

12は石敷きの東側で確認され、13が土器集積土坑から出土しており、それぞれ口径20.5cm、15.6cmを測る長胴甕である。両者とも駿東型甕の範疇で取り扱えない型式で、独自の系譜を辿ることができるものである。14はヘラケヅリ整形の甑の底部で、底径8.5cmを測る。

15は大型の駿東型甕で、口径42.6cm、胴最大径43.1cmを測る。土器集積土坑内の土器の大半はこの甕のもののように、接合するものは少ないが、類似した胎土、色調を示す甕の破片が多い。また、前述した11も胎土、色調が、この15と類似しており、同一個体の可能性がある。16は球形を呈する駿東型甕と思われる胴下半の資料で、底径9.6cmを測る。内外面とも表面の磨滅が著しく残りは悪い。

〈用途〉

丘陵縁辺から斜面に移行する変換点付近に位置するこの溝1は、残存状態の悪さもあって、その用途については不明な部分が多い。水路や富士山麓斜面に無数に認められる自然の流路と考えると、恒常的な石敷きの施設は、その流れを遮って邪魔になるだけで、適切なものとは言えない。逆に、この石敷きは流下する雨水などの流れを緩和させる機能を持ったダムのような施設と捉えられる。現状では、対応する側溝や道とし認定できる硬質な地面などは確認されておらず具体性には乏しいが、屈折部が認められ蛇行しながら斜面部に展開する点から、一応、この溝を道に伴う側溝として捉えている。このように、この溝を人為的な構造物と考えれば、比較的量の多い土器片の出土や地鎮祭的な行為に関連した施設（飯田1994）と考えられる土器集積土坑の存在など容易に解されるものである。

溝2（第18図）

〈構造〉

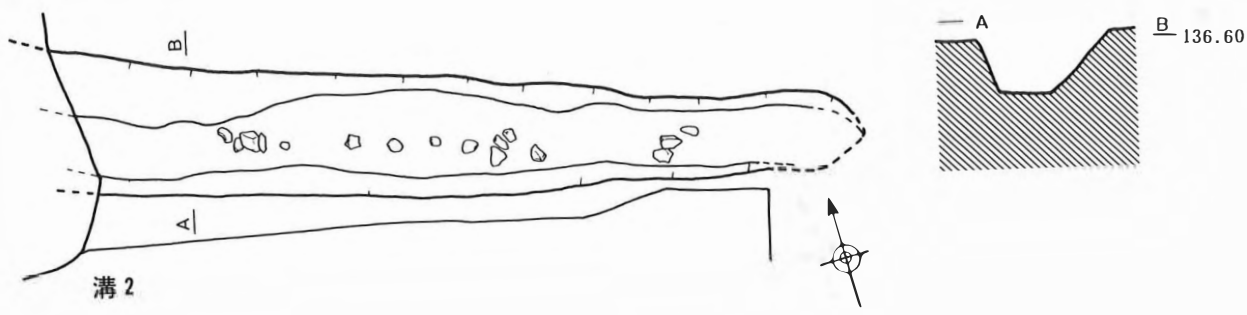
B-4、C-4を東西に走る溝で、C-4中央で掘り方が消失している。溝はその西端で幅110cm、深さ36cmを測り、断面形はすり鉢状を示す。覆土はスコリアを含む黒灰褐色土が主体で、竪穴住居と類似した内容を示す。

この溝は、溝の方向が竪穴住居や溜井などとは一致しない点や溝が竪穴遺構と近接しすぎる点などから、竪穴住居群との直接的な関連は想定されにくい。しかし、居住域を画する場所に位置しているとも言えないこともなく、溜井を含む水田や畑地などの生産域と居住域とを集落経営のある段階で分けたり、溝の底面が西に向かって下がっている事などから考えられるように集落内の排水路としての機能などが考えられる。

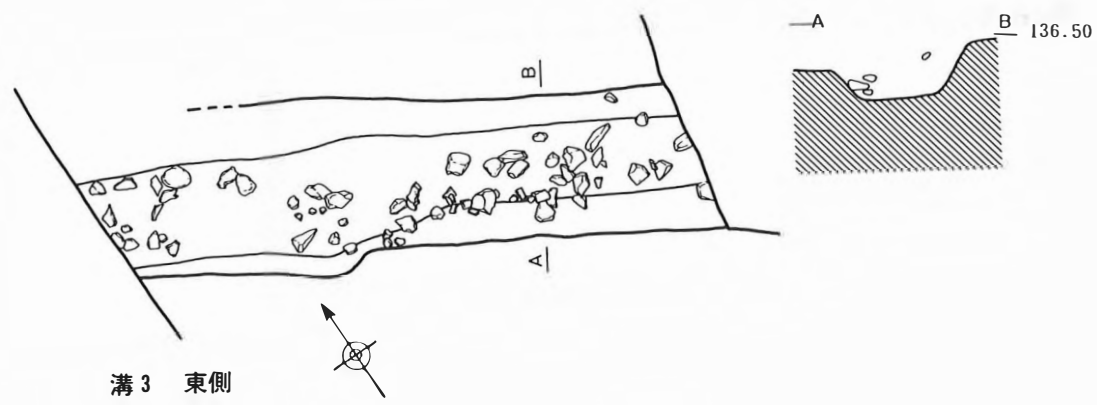
〈遺物〉

出土土器は、細片が少量見られるだけで、時代を比定できるものはない。そのため、覆土の状況より竪穴住居と近似した年代を想定しているものの、明確な時代設定はできない。

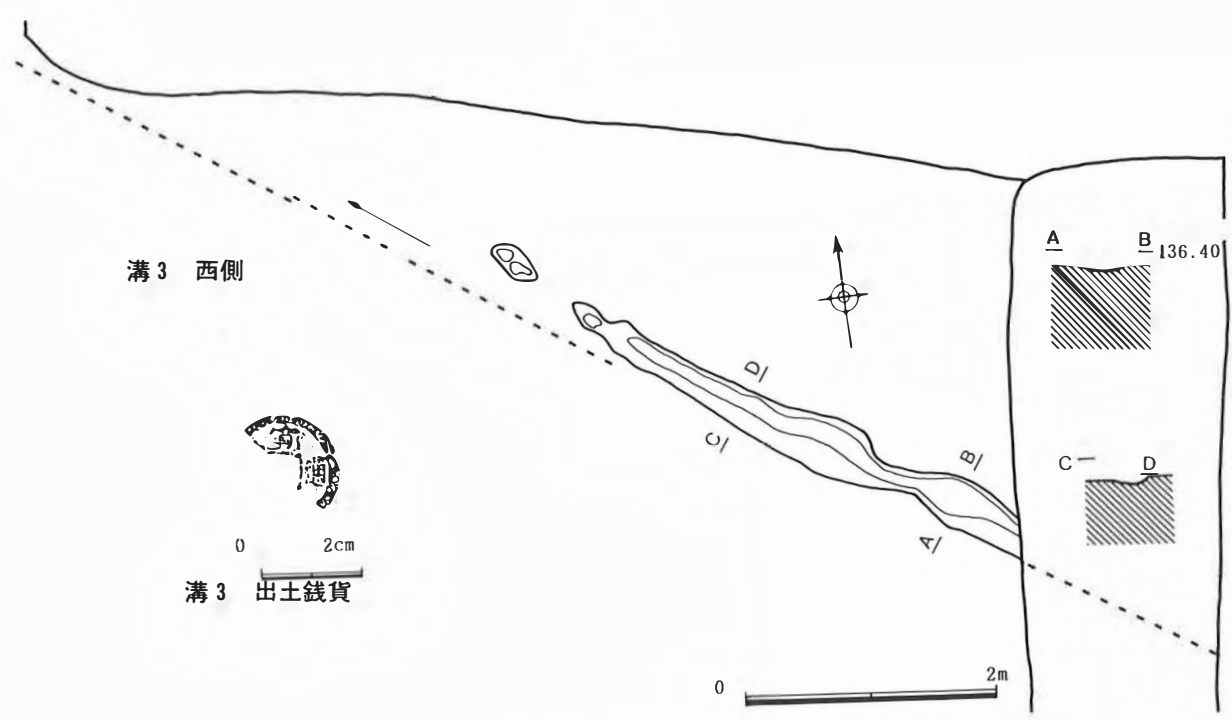
出土遺物は極めて少ない遺構であるが、溝全体の覆土中に拳大の自然礫が目立った出土を示している。



溝2



溝3 東側



溝3 西側

溝3 出土錢貨

第18圖 溝2・溝3

溝 3 (第18図)

〈構造〉

調査区中央を地形に沿いながらN-54°-Wの方位を示して延びる溝で、調査区をほぼ南東-北西に横断している。この溝は、溝1と溜井と重複関係にあり、いずれよりも新しい。D-6、E-6部分では掘り方が消失しており、その東側でも幅45cm、深さ6cm程度で全体の残存状況はよくない。ただ、溜井と重複関係にあるC-5、D-5部分では比較的良好で、断面「L」状、深さ40cm、幅135cmを測る。

覆土は、近世以降の遺構に普遍的に認められるやや粘質を帯びた暗灰褐色土が主体であるが、その中位から下位にかけて拳大の自然礫が、溝の南側部分に幾分偏在する状況で、多く認められる。また、溝の南壁際の底面には、砂利や土器の細片の堆積が連続して認められ、水路としての機能を持っていたことが理解される。底面の高低差は、東端(C-5)と西端(F-6)とで20cmの比高差をもって東側が高くなっている。

〈遺物〉

出土遺物は、近世の陶磁器片が少量認められるほかに、溝の東側部分で銭貨片(寛永通宝)が1点出土している。

溝 4

〈構造〉

調査区の南側を地形に沿って南東-北西に横断する溝で、C-8部分で溝1と重複関係にある。この溝は、約14mの距離を保ちながら溝3と平行しており、互いに相関関係を持ちながら水田を形成していたものと考えられる溝で、農耕施設のひとつとして捉えられる。そのため、溝の形態や覆土の状況など溝3と類似する。溝の規模は、最大幅80cmを有し、最も残りのよい東端で深さ15cmを測る。

〈遺物〉

土器、陶磁器の破片が少量検出されているが、小片のため図化できるものはない。

溝 5

〈構造〉

竪穴遺構を切ってB-3・4を東西に走る溝で、深さ7~8cm、幅60cmを測る。溝の西側に径75cm、深さ15cmの不整円形の土坑を伴う。遺物などは確認されていないが、覆土などの状況から近世の各遺構と近い時代が想定される。ただ、周囲に分布している土坑とはその位置関係から時間差が考えられるし、不規則で不明瞭な掘り方を見ると、人為的に掘削されたものかどうかすら認定されるものではない。

土坑

畑作に関連した施設と考えられる土坑が、B-3、C-4 に集中して3基確認されている。

土坑1

やや方形気味の土坑で径100cm、深さ15cmを測る。底面は平坦であるが東から西にかけて比高差10cmをもって傾斜している。遺物などの出土はない。

土坑2

ほぼ円形の土坑で、径102cm、深さ24cmを測る。底面は平坦であり、その西端に径21cm、深さ18cmの小ピットを伴う。遺物などの出土はない。

土坑3

やや楕円形の土坑で径118cm、深さ32cmを測る。北東壁はその上端が最大幅15cm程度で崩れており、残存状態は悪い。底面は平坦で、土坑1、土坑2とそれぞれ比高差20cm、10cmを測り、東側の土坑ほどその底面が低くなる状況が看取される。

土壙

調査区の南西隅に2基の方形土壙が確認されている。猪之頭養鱒場内遺跡の調査成果（富士宮市教育委員会1994）によれば、方形土坑の多くは墓として認識されるものが多いようで、同時代の円形土坑とは多分にその出土遺物や内容物に違いを示している。出土遺物などが認められないものの、今回検出のものについても一応土壙（墓）として捉えておく。

土壙1

調査区の南西隅に位置しており、溝1と重複している。学校建設など後世の削平が進んでおり、南側の2つの壁を消失している。深さ11cmを測る残存部での掘り方から、長辺115cm以上を測る方形土壙であることが想定される。出土遺物は土器の小片が少量認められる程度である。

土壙2

土壙1から150cmほどの間隔をあけてその東側に位置し、長辺115cm、短辺65cm、深さ15cmを測る方形土壙である。一部溝1と重複関係にあるが、その全体像は把握される。底面は、土壙1と同様に平坦で、同じ標高値を示す。出土遺物は確認されていない。

2. 年代と遺構の構成

今回の調査地点では、竪穴住居を主体とした集落と溝2、溝3からなる水田の2度にわたる土地利用の様子が窺えるが、それぞれいつごろのものとして捉えることができるのであろうか。

この遺跡が位置する駿河湾最奥部から東岸の東駿河から伊豆にかけての古墳時代後期の各遺跡では、遺構出土の土器に一定量の須恵器が含まれるため、その時代的な位置づけはある程度容易に設定でき、客観的な解釈を可能にしている。今回の場合も、集落は古墳時代後期の範疇で捉えることができる。

集落に関係する遺構の内、時代設定が可能な遺物の出土を見ているのは、第2号住居址と溝1の資料であり、それぞれの廃絶年代を表しているものと考えられる。第2号住居址は、1～4の須恵器坏の型式から陶邑TK217(田辺1981)段階、湖西古窯跡群第II期第6小期(後藤1989)段階、つまり7世紀第2四半期に比定される。また、溝1は2、3の須恵器がその指標となろう。共に比較的大型の型式であるが、型式特徴が明瞭な3は底部に渦巻き状のヘラケヅリが見られる型式で、口縁部を内傾させながら立ち上がらせ、その端部を丸く形作るものである。2、3とも陶邑MT85段階に比定されるものと考えられる。湖西古窯跡との併行関係では、湖西古窯跡群第II期第2小期(後藤1989)段階ぐらいに相当するものであり、6世紀中頃の年代が与えられよう。1は2、3より形式的に古相を示すものであるが、この溝の使用された年代を考えるのに非常に有効な資料である。小破片のため細かな型式特徴は指摘されないが、陶邑MT15段階の範疇で捉えられるものと思われ、6世紀第1四半期から継続的なこの溝の使用が窺われるものである。調査範囲が諸々の事情で限定され、僅か660㎡のみの調査ではあったが、これらの年代設定からも分かるように、この丘陵に対する多彩な土地利用の様子が窺える。

少量の土器が採取されている縄文時代、古墳時代前期に関しては、遺構としての具体性に乏しいので本書の解説からは除外するが、地点を離れた部分に相当する遺構が存在しているものと考えられる。今後の詳細な周辺の調査が必要となろう。一応、この木ノ行寺遺跡で、人間の生活の痕跡としてその嚆矢が窺えるのは縄文時代早期条痕文土器段階からである。そして、本格的な開墾の跡が窺えるのは、溝1の年代である6世紀前半からであろう。ただ、今回の調査地点は、この段階のものがこの溝1しか確認されておらず、周辺にいかなる集落あるいは古墳群を構成していたか現状では分からない。この段階の集落などは、道の一部と思われる溝1が丘陵上とその眼下に展開する沖積地の生産域(田畑)とを結んでいけば、丘陵上に展開しているものと思われ、この木ノ行寺遺跡、三ッ室遺跡や大室古墳など同時代の遺跡が、この丘陵上も含めた調査地点の北側に広く分布していることから、今まで潤井川中流域で未発見だった6世紀代の集落の存在が想定されるものである。

今回の調査で集落は、竪穴住居、竪穴遺構、溜井からなる建物群として確認されているが、第1号と第2号とで若干の時間差を考慮しなければならないが、陶邑TK217段階の須恵器の出土が認められる竪穴住居と、それと方位的な類似性が認められる竪穴遺構や溜井は、ほぼ同時期の遺構群として捉えられるものと思われる。そして、第2号住居出土の土器から、それが7世紀第2四半期を中心とした時期であることが判明している。集落の縁辺に位置する溜井とそれを取り巻く竪穴住居などの状況が分かるとともに、この段階の

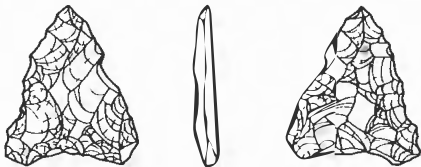
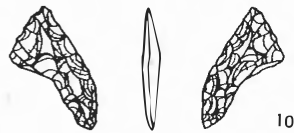
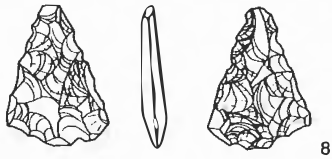
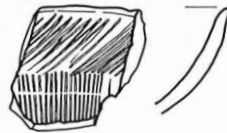
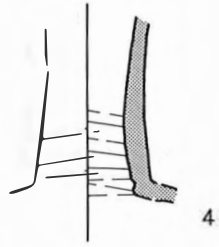
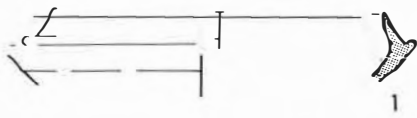
この集落と同じ古墳時代後期に属する溝1とでは、最低50年以上の空白期間が存在しており相互の関連は極めて薄いものと思われる。ただ、遺構として確認されていないが8世紀代の土器(第19図2・3)も検出されている状況を踏まえると、6世紀前半から8世紀前半まで集落が伸縮を繰り返しているながら継続的に営まれた可能性もあり、最も拡大された7世紀代の集落の一部を今回の調査で確認したとも考えられる。

今回の調査地点では、この集落の経営が終って溝3、溝4が敷設されるまでの間の遺構、遺物の出土は見られない。調査で最も新しい段階の土地利用が確認されたのは、溝3、溝4とそれらとの関連が窺える土坑群および土壌が構築された時代のものである。この段階の土地利用の状況を概観すると、東から西側への流路となる溝3と溝4により区画された水田を中心として、その北側に農業用施設として肥料などを溜めておいたと考えられる土坑(富士宮市教育委員会1994)が敷設されている状況が認められる。また、溝4の南側には2基の土壌が認められ、墓域を形成していたことが分かる。この区域は、北側を溝4により区画されることにより限定された範囲が認識され、墓域としての土地利用の跡を窺うことができる。この段階の各遺構は、ほとんど遺物の出土が認められず厳密な同時性は指摘できないが、類似した覆土の状況や遺構の配置から近接した年代は想定され、表土や溝3から若干の出土が認められる陶磁器の小片や銭貨より、17世紀後半の年代が与えられるものと考えている。そうなれば、18世紀初頭の「宝永の噴火」に伴いこれらの遺構の機能が停止している可能性も考えなければならない。

この土壌と溝、土坑との時間的な関係については分からないが、それぞれの区域は厳密に区分されていたようで、整然とした位置関係を示している。このように、江戸時代前半に今回の調査地点は、生産域と墓域として利用されていたようである。

参考文献

- 堤 隆 1993 「住居廃絶時における竈解体をめぐる」『山梨考古第46号』山梨県考古学協会
- 能登健他 1983 「赤城山南麓における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現—」『信濃 第35巻第4号』信濃史学会
- 飯田充晴 1994 「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」『季刊 考古学 第46号』雄山閣
- 富士宮市教育委員会 1994 『猪之頭養鱒場内遺跡』
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会



第19図 遺構外出土遺物

第IV章 まとめ

木ノ行寺遺跡は、学校建設などの開発による遺物の出土などにより、古くから時代の複合する遺跡として知られていた。また、この遺跡の北側に位置し、墳径15mを測る円墳である市指定史跡の大室古墳との関連も窺える資料も比較的多く採集され、富士根地区の有力な遺跡の一つとして捉えられていた（富士宮市教育委員会1993）。しかし、その具体的な内容については分からない部分が多い遺跡であった。今回の調査は、この木ノ行寺遺跡や三ッ室遺跡、大室古墳などが広範囲な分布を示して立地する中沢川西岸の広い平坦面を持つ丘陵（第4図）における初めての本格的な調査である。

今回の調査地点は、学校建設時の造成による壊滅的な状況の中で、多くの遺構が既に消滅していると思われていた部分であったが、7世紀代を主体とした集落と江戸時代の遺構群が検出され、大きな成果が上げられた。特に、集落は、富士山西南麓でかつてほとんど調査例のない古墳時代後期の類例として、極めて重要である。ただ、以前の開発による遺構の消滅は、建物群の構成や水路・土坑などの構造物の数や大きさに大きな影響を及ぼしており、各遺構の相互関係などを論じる際、それぞれが建築当時の姿を直接表しているものでないことを十分考慮しなければならないものである。

1. 遺構について

今回の調査で7世紀前半の集落が確認されたことは、かつての居住域の様相を探るうえで優良な資料を提示したと言える。そして、遺跡の保存状態の極めて悪い状況のなかでありながらも、形態の違う竪穴遺構群と溜井が確認されたことは、古墳時代後期の集落景観を考える上で新たな視点となるものである。

各遺構は、一定の間隔を有してそれぞれが位置しており、同時代性が指摘される。そのため、出土遺物も遺構に関連するものは、大きな時間差が認められない。第1号住居と第2号住居は、やや形態も規模も違い相互に時間差がある可能性もあるが、遺構群としての変遷が辿れるほど住居の型式要素は認め難い。そして、方位的な類似性が認められる第1号住居と竪穴遺構、溜井との親縁性は指摘できそうである点を踏まえると、これらの建物群は単位建物群の一面をなす集合体であったものと想定される。竪穴住居間の明らかな関係については解明できないが、竪穴住居と竪穴遺構、さらに溜井からなる構成は、集落の縁辺に展開する単位建物群のひとつの景観を表している。ただ、周辺の遺構に対する破壊が進んで、その多くが消失しているため、その面的な広がりについては確認できず、単位建物群の構成やそれが小区画となって、より有機的な関連を持つ「屋敷地」（都出1989）などは抽出されるものではない。また、灌漑と生活用水を確保する施設である溜井は、その規模や用途から集落内で共有された設備であると容易に考えられるが、遺構間の距離や占有する位置から溜井との関連が窺われる竪穴遺構も溜井の管理や溜井で使用する道具の管理場所などの用途を考えれば、溜井同様に集落で共用された施設と捉えられるもので、単位建物群のひとつの要素として個別の経営が行われたとは考え難い。このような構成を示す遺構群は、通例の竪穴住居数棟から成る個別経営を志向する一般的な単位建物群とは大きくその景観を違えており、集落内で常時共有する空間として捉えられる極めて特異な場所であると言える。

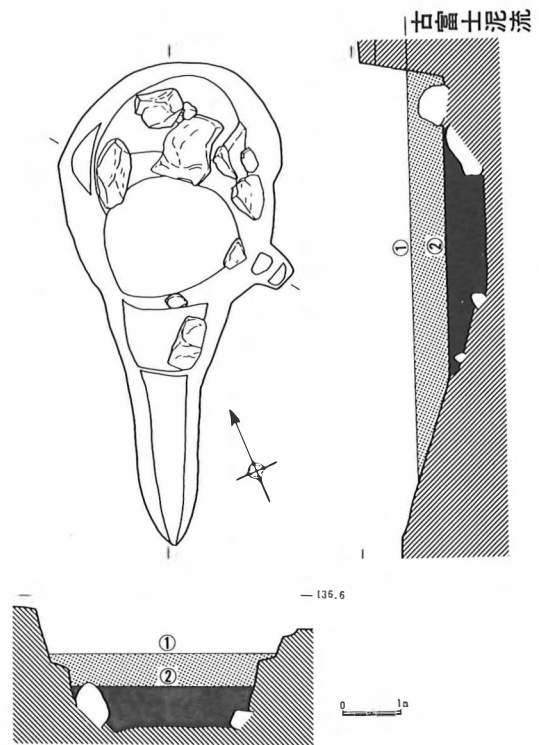
このような空間を規定する溜井は、富士山麓では初見で、比較的珍しい遺構であり、灌漑農耕の方法や湧水の利用方法を知るうえで重要な遺構と言える。ここでは、その湧水の採集について少し考えてみたい。

不透水性の古富士火山泥流層まで掘り込むことによって流下している地下水を湧水として採集する施設であるこの溜井は、第20図からも分かるように古富士火山泥流層を140cmほど掘り込んで構築されている。そのため、古富士火山泥流層上面に水位（水位①）が合えば水深140cmの貯水部分を得られることになり、掘削しにくく、巨大な礫を混入する古富士火山泥流層を果敢に掘り穿めて貯水部を形成している状況が窺われる。そして、この水位の水量が、地質的な情報では、この溜井の貯水の最大容量に近いものを示していると考えられる。ただ、確認されている導水部先端は、この水位より高く自然

に溜井内の水が流れ出す形態を示さない点は注意される。それが貯水部の認識の誤りか、あるいは溜められた水を汲み出す道具を使用して流下させたのか、具体的な遺構、遺物としては確認されていないため多くは言及できないが、常時の連続的な湧水の流出を必要としないと考えれば後者の状況を想定したい。

第III章の解説で述べている溜井の各部位の名称（第17図）は、平面形から想定されるもので、水路状の溝部分を導水部、深く、大きく土坑状に掘削されている部分を貯水部として区別したが、実際に湧水の涵水状態と対応するかは分からない。ただ、その導水部と貯水部に合わせて設定した第20図の水位②からも分かるように、意図的に土坑内で最も深く掘削された部分にその水位が対応している。これが、常時涵水していた部分なのかもしれない。実際、発掘調査中でもこの水位までいつも水が湧き出ており、湧水機能を持つ施設であることが確認されている。確実に安定した湧水を確保するには、水位②以下までの深度を持たせて掘削しなければならなかったのだろう。近年は湧水量が減少しており、地下水も渇水期を迎えていると言われている（遠藤1988）が、この部分まで掘削すれば確実に湧水が得られるようである。

このように、今回確認されている溜井は、湧水を得る貯水部と排水に関連する導水部を機能的に分けて造られた施設であることが分かり、継続的な水の確保に供された施設であることが分かる。また、周辺は自然の湧水地が点在することが知られているが、それらから取水できる量以上の活発な水田開発に伴う灌漑用水獲得の必要性から創造された農業施設と捉えられ、7世紀前半代からの積極的な農地の拡大が窺えるものである。そして、この施設が盛んに使用された時代は、第1号住居や第2号住居などの占有から分かるように集落が最も拡大した段階に対応しそうで、木ノ行寺遺跡の集落で、居住域の拡大が図られ、大きく人口が増加し、活発な生産活動が行われるようになった段階に当たるようである。



第20図 溜井と水位

2. 遺物について

木ノ行寺遺跡では、溝1で6世紀の資料が、また第2号住居で7世紀の良好な資料がそれぞれ確認されている。いずれも律令成立以前の土器形式を表すものとして重要であるとともに、いままで、まとまった資料が確認されていなかったこの富士山麓では極めて希有なものとして評価される。

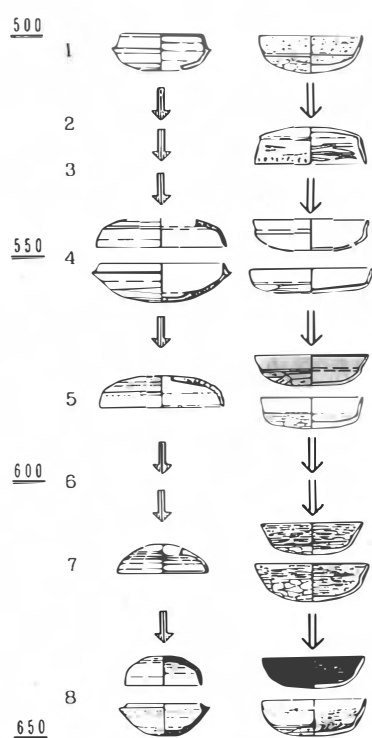
東駿河地域の6～7世紀の土器編年は、近年、須恵器の型式変化を踏まえた上での精緻な在来系土器に対する検討が行われるようになり、徐々にではあるが、各形式の時間的変遷が解明されつつある（渡辺1985、北川1988、山本1989a、同1989b、同1994）。ただ、6世紀前半や7世紀後半の資料などについては、まだ良好な一括資料に恵まれておらず、連続的な土器型式の組列を構成するまでには至っていない。

6世紀代の土器は、溝1出土土器（第15図、第16図）で代表されるように、須恵器と土師器で構成され、器種として、坏、甕、甑、高坏、鉢などが認められる。溝1の資料は、その大半が6世紀中葉のもので占められると思われるが、各器種の特徴的な型式で構成されており、土器の型式変化や系譜の問題を考える上で多くの視点を提示するとともに、東駿河でも、この潤井川流域の地域色を明瞭に表しているものである。地域色は、在来系土器である土師器の各器種に反映され、特有な型式として把握される。

坏は、須恵器模倣坏（第15図-4、5、6）と5世紀から伝統的に残る椀形のもの（第15図-7）や口縁端部を内折するもの（第15図-8）などが認められる。それらの内、この溝1の段階には、模倣坏が主体的な出土を示すようになり、関東地方と同様の形式組成を示すようになる。ただ、第15図-4、5のように口縁部を内彎させる型式は、近接する相模などには主体的な分布を示さず、この東駿河および富士川を媒介とした交流が指摘できる甲斐で独自の分布を示す（長谷川1988）。そして、この内彎口縁坏は、6世紀後半～7世紀前半にかけて、模倣坏のなかでも主体的な出土を示している（渡辺1985）。

この内彎口縁坏は、三島市金沢遺跡10号住居跡（三島市教育委員会1994）や富士市宮添遺跡D地区第11号住居跡（註）さらに神奈川県海老名市尼寺北方遺跡第1号住居址（滝沢1994）などの陶邑TK47段階の須恵器を伴う一括資料の中に認められ、6世紀初頭には成立している。この段階には、他の模倣坏やハケメ整形を特徴とする初源的な駿東型甕なども成立しており、東駿河の古墳時代後期の主要器種が出揃う段階としても捉えられる。また、この段階は金沢遺跡や宮添遺跡例からも分かるように竪穴住居内のかまどが普遍化しており、根本的な生活環境の変化が窺える段階でもある。

須恵器の型式変化を基軸として、内彎口縁坏の変遷を辿り、溝1出土資料の時間的な位置づけを設定したのが第21図である。内彎口縁坏は、前述のように6世紀初頭に成立しているようであるが、陶邑TK23や陶邑TK47段階で普遍的に認められる口縁部を内彎させる須恵器坏をモチーフにしているものと考えられ、比較的小ぶり、口縁部と体部を画する段が明瞭な型式である。そして、7世紀前半まで模倣坏の一型式として独自の型式変化を示している。法量的には、須恵器のそれと5段階までは同調しており、4段階に口径のピークが認められるようである。



1. 三島市金沢遺跡10号住居跡
2. 富士市沢東遺跡21号住居址
4. 富士宮市木ノ行寺遺跡溝1
5. 三島市中島下舞台遺跡
第16号住居址
7. 三島市金沢遺跡13号住居跡
8. 函南町伊豆通信病院敷地内
遺跡第34号住居跡

第21図 須恵器と内彎口縁環の変遷

(註)

富士市宮添遺跡については、調査担当者の前田勝己氏の御好意により、出土資料を実見させていただいた。この遺跡のかまどを持つ第11号住居址からは、5世紀からの伝統的な型式の土器に伴って陶邑TK47段階の須恵器と須恵器模倣坏やハケメ整形の初現的な駿東型の甕などの出土が認められる。

参考文献

富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡』
 都出比呂志 1989 「古墳時代集落と階層分化」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
 遠藤英男 1988 「湧水」『富士宮市の自然』富士宮市
 渡辺康弘 1985 「東部地方の6～7世紀の土師器」『静岡県考古学会シンポジウム6 古墳時代の土師器』静岡県考古学会

この内彎口縁環は、1～4段階では口縁部上位あるいは端部のみを内彎させるものが多いのに対して、5段階以降には口縁部全体を内彎させるものが増える大きな変化が窺えらるとともに、口縁部が直立気味に開くものと外反するものへと大きく分化する。そのため、5段階以降は形式的な細分化が進み、型式差が時間差なのかバラエティーなのか容易には認識できなくなる。その反面、法量的には定型化した型式になっていたようで大きな差がなくなり、複雑な状態に拍車をかける状況になっている。このように、須恵器の型式変化に同調していた1～4段階と5段階以降とに明らかな画期が指摘できる。

この4段階と5段階の画期は陶邑TK43段階の開始に対応すると思われるが、東駿河では、内彎口縁環を含めた須恵器模倣坏各型式についても型式分化が進み、多彩な変化を示し出す段階として捉えられ、さらに定型化した駿東型甕出現期にも当たり、古墳時代後期での一つの画期としてとらえられている段階である(北川1988)。そして、その画期は、東駿河における群集墳の本格的な造営の開始という象徴的な事象(植松1992)とも合致するのである。

木ノ行寺遺跡の古墳時代後期集落は、この画期を挟むようにして、途中にこの地区で集落の営まれない長い空白期間を認めることができるが、この画期が社会構造の根本的な違いまでも示すのならば、それぞれ大きく様相の違えた集落景観を想定しなければならないものである。

- 北川恵一 1988 「「駿東型の甕」の初現と終末について」『沼津市博物館紀要12』
沼津市歴史民俗資料館 沼津市明治資料館
- 山本恵一 1989 a 「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」『沼津市博物館紀要13』
沼津市歴史民俗資料館 沼津市明治資料館
- 山本恵一 1989 b 「静岡県下の6～8世紀の黒色土器について—主に東部地方を中心として—」『東国土器研究第2号』東国土器研究会
- 山本恵一 1994 「駿河湾東部の古墳時代の土師器について」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
- 長谷川厚 1988 「古墳時代後期土器の研究(2) —地域性の諸問題について—」
『神奈川考古第24号』神奈川考古同人会
- 三島市教育委員会 1994 『金沢遺跡』
- 滝沢 亮 1994 「相模の古墳時代後期土器成立への一視点—海老名市尼寺北方遺跡第5
次調査の成果から—」『神奈川考古第30号』神奈川考古同人会
- 中村 浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶器III』大阪府教育委員会
- 植松章八 1992 「遠江・駿河・伊豆における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報
告第44集』国立歴史民俗博物館
- 富士市教育委員会 1992 『沢東A遺跡—埋蔵文化財発掘調査概報—』
- 三島市教育委員会 1983 『中島下舞台遺跡』
- 函南町教育委員会 1984 『伊豆逄信病院敷地内遺跡』

出土遺物観察表①

第1住居址

番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	遺存状態	備考
1	土師器 甕	9.1	外面 タテハケメ(7本/cm)→ ヨコナデを粗く施す 内面 ヨコハケメ(5本/cm)	胎土 きめが粗く、砂粒の混入が目立つ 焼成 普通 色調 (外)暗褐色 (内)暗赤褐色	底部1/2存	底部木葉痕 駿東型
2	土師器 甕?	4.6	外面 タテヘラケツリ	胎土 長石・石英が目立つ 焼成 やや硬質 色調 (外)暗赤褐色 (内)にぶい 橙色	底部完存	底部木葉痕

第2号住居址

番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	遺存状態	備考
1	須恵器 坏蓋	(4.1)	ロクロ成形 天井部外面ヘラケツリ	胎土 きめが細かく、長石が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/4以下	外面 自然釉
2	須恵器 坏身	(7.1)―(9.1)	ロクロ成形 外面 体部下位ヘラケツリ	胎土 きめが細かく、長石が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/4以下	
3	須恵器 坏身	(8.5)―(10.4)	ロクロ成形 外面 底部無調整	胎土 きめが細かく、長石がやや 目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/3存	
4	須恵器 坏身	(9.0)―(10.9)	ロクロ成形 外面 底部ヘラケツリ	胎土 きめが細かく、長石が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/4存	
5	土師器 坏	10.4 4.0	口縁部 外面～内面上位ヨコナデ 外面 体部無調整、一部指頭痕	胎土 きめは細かいが、小石が目立つ 焼成 やや軟質 色調 にぶい黄橙色	1/4存	底部木葉痕 西駿河系
6	土師器 坏	(11.8)	外面 口縁部ヨコナデ、体部上位 無調整以外ヨコヘラケツリ 内面 ヨコヘラミガキ	胎土 きめが細かい 焼成 普通 色調 にぶい黄橙色	4/1存	内面黒色処理
7	土師器 坏	12.1 4.5	外面 口縁部ヨコナデ、体部ヨコ ヘラケツリ→口縁部～上位 ヨコヘラミガキ 内面 ヨコヘラミガキ	胎土 きめが細かく、黒色砂粒、 赤色砂粒目立つ 焼成 やや硬質 色調 (外)にぶい黄橙色、(内)に ぶい橙色	1/3存	
8	土師器 甕	17.0	頸部内面～頭部外面ヨコナデ 口縁端部内面肥厚 胴部外面タテハケメ、内面ヨコハ ケメ(7本/cm)	胎土 きめは粗く、長石の混入が目立つ 焼成 普通 色調 (外)暗褐色 (内)暗赤褐色	口縁部1/2	外面スス付着 駿東型

溜井

番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	整形・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	遺存状態	備考
1	須恵器 坏身	(8.3)―(10.5)	ロクロ成形 外面 底部無調整、体部下位ヘラ ケツリ	胎土 極めて粒子が細かく、少量 の長石が見られる 焼成 硬質 色調 灰色	1/3存	外面ヘラ記号

出土遺物観察表②

溝1

番号	器種	口径 器高 底径(cm)	整形・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	遺存状態	備考
1	須恵器 坏身	(10.3)－(12.5) ———— ————	ロクロ成形 口縁部ヨコナデ、口縁端部段を持って内傾	胎土 きめが粗く、石英、長石が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/4以下	
2	須恵器 坏蓋	(15.7) ———— ————	ロクロ成形 天井部外面へラケヅリ 内面 同心円状のタタキ目?	胎土 きめがやや粗く、石英、長石が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/4以下	
3	須恵器 坏身	(15.0)－(17.0) 4.75 ———— ————	ロクロ成形 底部外面へラケヅリ 内面 同心円状のタタキ目	胎土 きめが粗く、石英、黒色砂粒の混入が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/2存	
4	土師器 坏	(13.6) (3.8) ————	口縁部外面～内面ヨコナデ 体部外面へラケヅリ 口縁部内彎	胎土 ϕ 1mmの黒色砂粒が目立つ 焼成 普通 色調 赤色	1/4以下	赤彩
5	土師器 坏	(14.4) 3.2 ————	口縁部ヨコナデ 体部外面へラケヅリ 口縁部内彎	胎土 きめがやや粗く、長石の混入が目立つ 焼成 普通 色調 (外)口縁部赤色、体部にぶい黄橙色、(内)赤色	1/2存	赤彩
6	土師器 坏	(13.1) 3.2 ————	口縁部ヨコナデ 体部外面へラケヅリ	胎土 きめが細かく、石英、長石が目立つ 焼成 普通 色調 (外)口縁部赤色、体部灰黄褐色、(内)赤色	1/2存	内面～口縁部外面 赤彩
7	土師器 坏	(14.3) ———— ————	口縁部ヨコナデ 体部外面へラケヅリ 内面ヨコナデ→粗くヨコへラケヅリ	胎土 きめは細かく、石英、長石が目立つ 焼成 普通 色調 赤色	1/4以下	赤彩
8	土師器 坏	(15.9) (4.6) ————	底部外面へラケヅリ 内面放射状のヘラミガキ(暗文) 口縁端部内彎させてやや肥厚	胎土 きめは細かいが、小石の混入が目立つ 焼成 やや軟質 色調 橙色	1/4以下	
9	土師器 甕	(22.0) ———— ————	外面 口縁部～頸部ヨコナデ、胴部タテハケメ 内面 ヨコハケメ(6本/cm)、口縁端部内面肥厚	胎土 きめが粗く、石英、長石の混入が目立つ 焼成 普通 色調 橙色	1/4以下	駿東型
10	土師器 甕	———— ———— 9.4	外面 タテハケメ(9本/cm)→粗いヨコミガキ 内面 ヨコハケメ、接合部指頭押え	胎土 きめが粗く、石英、長石の混入が目立つ 焼成 普通 色調 橙色	胴下半1/4 存	底部木葉痕 駿東型
11	土師器 甕	———— ———— 9.3	外面 タテハケメ→ヨコナデ 内面 一部ヨコハケメ(8本/cm)	胎土 きめが粗く、長石が目立つ 焼成 普通 色調 灰褐色	底部2/3存	底部木葉痕 駿東型
12	土師器 甕	(20.5) ———— ————	口縁部ヨコナデ 外面 タテハケメ(4本/cm)	胎土 長石、 ϕ 2～3mmの小石が目立つ 焼成 普通 色調 褐色	1/4以下	遠江系
13	土師器 甕	(15.6) ———— ————	口縁部～頸部ヨコナデ 体部外面上位→中位ヨコ、ナメハケメ(7本/cm)	胎土 きめが細かく、石英の混入が目立つ 焼成 やや硬質 色調 (外)灰褐色(内)にぶい褐色	胴部上位 1/3存	遠江系
14	土師器 甗	———— ———— (8.4)	外面 タテへラケヅリ 内面 ヨコへラケヅリ	胎土 きめが細かく、混入物は少ない 焼成 やや軟質 色調 にぶい黄褐色	1/4以下	

出土遺物観察表③

溝 1

番号	器種	口径 器高 底径(cm)	整形・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	遺存状態	備考
15	土師器 甕	(口径 42.6) (胴径 43.1)	頸部外面～口縁部 ヨコナデ 外面胴部上位 タテ、ナナメハケ メ(14本/cm)→ナデツケ 外面胴部下位 タテハケメ→ナデ 内面ヨコハケメ、接合部指頭押え	胎土 きめが粗く、石英、長石が 目立つ 焼成 普通 色調 (外)橙色(内)にぶい橙色	1/3存	外面スス付着 駿東型
16	土師器 甕	(胴径 32.8) (底径 9.6)	内外面 表面剝離が著しい	胎土 きめが粗く、石英、長石の 混入が顕著 焼成 軟質 色調 にぶい赤褐色	底部完存	駿東型?

遺構外出土遺物①

番号	器種	口径 器高 底径(cm)	整形・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	遺存状態	備考
1	須恵器 坏身	(13.0)-(15.5)	ロクロ成形	胎土 石英、長石、の混入が目立 つ 焼成 硬質 色調 灰色	1/4以下	
2	須恵器 坏蓋	(15.6)	ロクロ成形	胎土 緻密で石英が目立つ 焼成 硬質 色調 灰白色	1/4以下	外面自然釉
3	須恵器 坏身	————— ————— (10.9)	ロクロ成形 底部外面へラケツリ 断面四角形の高台	胎土 きめが細かく、石英が目立 つ 焼成 硬質 色調 灰白色	1/4存	
4	須恵器 長頸瓶	————— ————— —————	ロクロ成形	胎土 きめが細かく、石英の混入 が目立つ 焼成 硬質 色調 灰色	頸部全周	外面自然釉
5	高坏	————— ————— —————	脚台部外面 横線文+穿孔3ヶ所 坏部内面 ヘラミガキ 脚台部内面 中央刺突痕(軸芯痕)	胎土 きめは細かいがφ1mmの石 英が目立つ 焼成 普通 色調 橙色	接合部全周	古墳時代前期 溝1覆土
6	土師器 坏	————— ————— —————	体部外面下位 ヘラケツリ、他は ヨコナデ→粗くヘラミガキ 内面 放射状暗文	胎土 きめが非常に細かく、長石 の混入が比較的多い 焼成 やや硬質 色調 橙色		内面放射状暗文 畿内系
7	土師器 皿	————— ————— —————	外面 ヨコナデ→下位ほど丁寧な ヨコヘラミガキ 内面 ヨコナデ→放射状暗文	胎土 きめが細かく長石が目立つ 焼成 普通 色調 橙色		内面放射状暗文 畿内系

遺構外出土遺物②

番号	器種	形態	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
8	石 鏃	凹基有茎鏃	黒曜石	(1.90)	(1.35)	0.30	(8.15)
9	石 鏃	凹基無茎鏃	黒曜石	(2.10)	(1.75)	0.30	(8.90)
10	石 鏃	凹基無茎鏃	黒曜石	1.65	(1.00)	0.23	(2.35)

報告書抄録

ふりがな	きのぎょうじいせき							
書名	木ノ行寺遺跡							
副書名	静岡県立富士宮東高等学校グラウンド改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	静岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	渡井 英誉							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418 静岡県富士宮市弓沢町150					TEL 0544-22-1187		
発行年月日	西暦1995年3月31日							
所収遺跡 ふりがな	所在地 ふりがな	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木ノ行寺遺跡 きのぎょうじいせき	富士宮市小 いづみき 木ノ行寺 ふじのみやしこ	22207	市番号 112 県番号 富士宮市 61	35° 13' 20"	138° 37' 05"	19940131~ 19940326	820	県立富士宮東高等学校グラウンド整備に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
木ノ行寺遺跡	集落と 水田	古墳時代 後期	竪穴住居	2軒	土師器・須恵器		富士山麓では発見例の少ない古墳時代後期集落	
			竪穴遺構	1棟				
			溜井	1基				
			溝	2条				
		江戸時代 前半	溝	3条				
			土坑	3基				
			土壇	2基				

木ノ行寺遺跡

1995年3月

編集 } 静岡県教育委員会
発行 } 〒420 静岡県静岡市追手町9番6号
富士宮市教育委員会
〒418 静岡県富士宮市弓沢町150
☎(0544)22-1111(代)

印刷 株式会社 きうちいんさつ

【写真】



図版 1



遺跡遠景



調査区とグラウンド



調査区全景

(北→南)



調査区近景

図版 3



第 1 号住居址

(南→北)



第 2 号住居址
検出状況

(南→北)

図版 4



第 2 号住居址

(南→北)



第 2 号住居址かまど



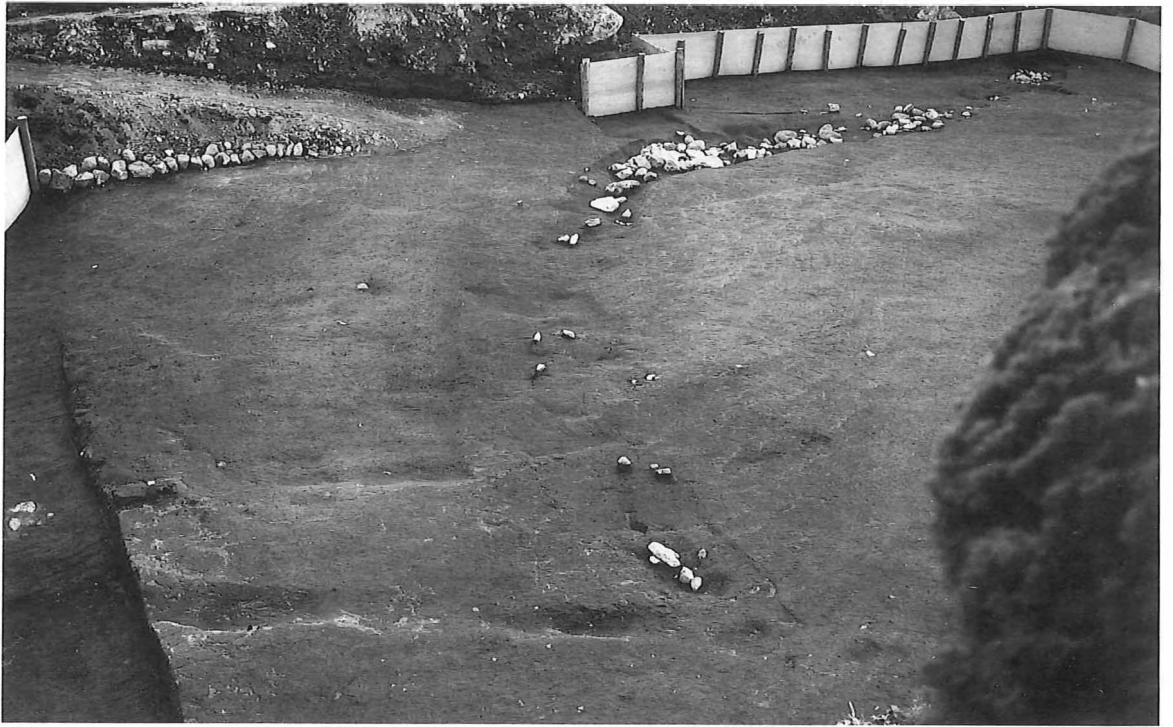
溜井

(北→南)



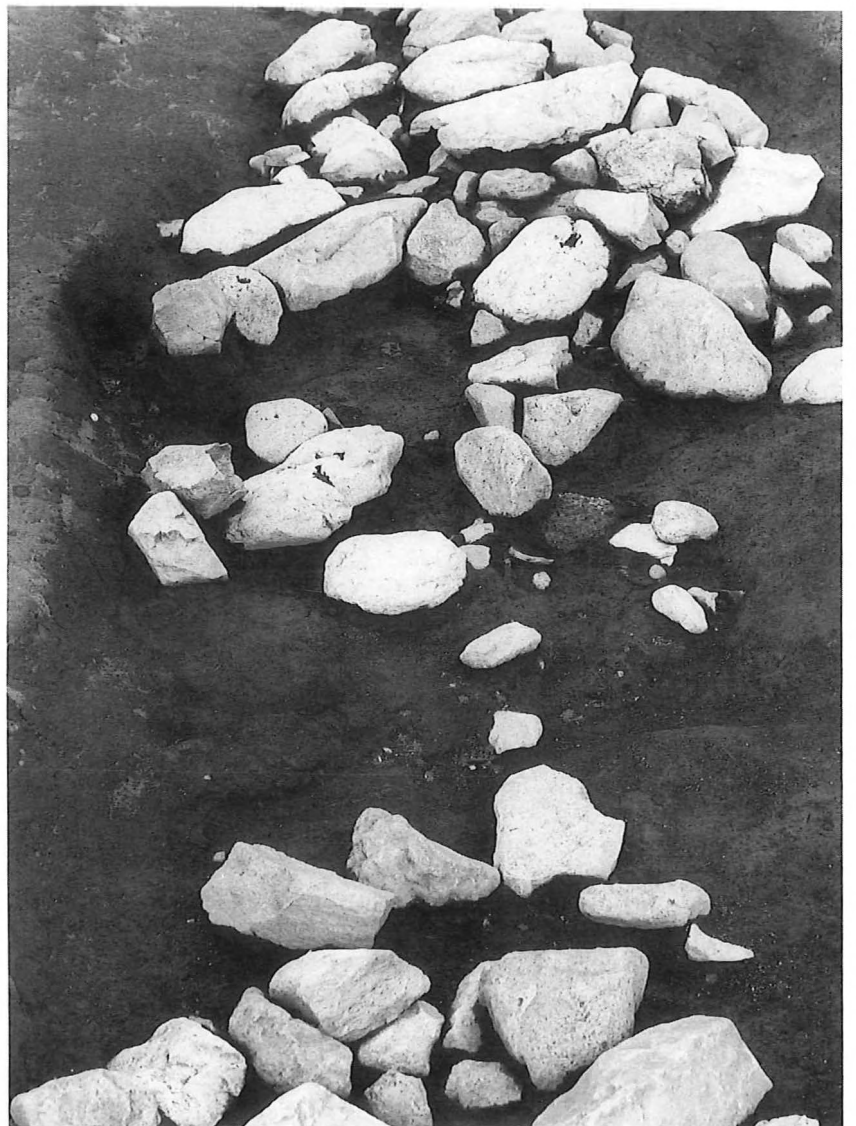
溜井埋没状況

(北西→南東)



溝 1

(北西→南東)



溝 1 (部分)

(南東→北西)

图版 7

第 2 号住居址



溜井



溝 1

